

八五四

年に、愛慕弟子の一人西武(別項)が寺町妙滿寺で
俳會を開いてゐるが、これを貞徳一生の會席
始めと傳へる説は誤りであらう。かくて寛永
十年(六十三歳)に、白門の俳諧集の第一集たる
重頃の「狗猪集」(別項)が出て、同年に親重の
「詩語發句帳」(別項)も出で、同十三年には西
武の「久留流」や、親重の「はなび草」(各別項)が
成るなど、この頃から次々に白門の俳書が現
はれるなど、この頃から次々に白門の俳書が現
はれるに至つてゐる。一體に貞徳傳には作爲
や誤傳が多いやうで、隨流の「貞徳水代記」(別
項)の如きは、常に據られるものであるに拘は
らずこれがある。貞徳自身の「藏恩記」(別項)、
その他の外、貞室の「貞徳終焉記」、以悅園集の
「道樂集」序中の貞徳傳の如きは先づ確實であ
るが、季吟の「芭蕉泥社」中の貞徳傳の如きは
既に誤傳が含まれてゐる。貞徳が俳諧一道の
宗匠を許免されたと云ふ傳や、花の本號を允
許されたと云ふ傳も更に確證がなく、寧ろ反
證が考へられ、貞徳が歳且の三ツ物(別項)を
始めた如く傳へる説も誤りであり、貞室(別項)
自身が貞徳の俳諧相贈者と云ふのは、貞室の
作爲であるとの反證があり。西武を貞徳の
俳諧相贈者とする西武側の説は、西武が點者
を許免されたことを附會したものである。さ
て多方面な貞徳には多くの弟子があるが、そ
の主なる人々は、和學・和歌には加藤經齊・望
月長野・和田以悅・木瀬三之等があり、和學・和
歌・俳諧を受け継いだ人に北村季臥があり、狂
歌・俳諧の方には、石田未得・半井ト斐・高瀬梅
盛・池田正式等があり、俳諧の方には所謂七詩
仙・五詩仙(各別項)があり、俳諧の方には所謂七詩
仙・五詩仙(各別項)を初め門人が顕る多い。た
だ長子昌三(足立)が懶家を以て立つたのは、
下冷泉家との關係に由來してゐる。

徒然草賦草八卷（慶安五年）○和句解五卷（寛文二年）○九六新註一卷○百人一首抄一卷（萬治三年）○堀川百首計要抄四卷（貞享元年）○和歌寶珠二十卷○歌林櫻樹二十八卷○長頭丸蘭筆一卷（慶長十年）○白鷺自歌合二卷○延陀丸姑題二百首一卷○道遊慰抄（道遊集）六卷（延寶五年）○連歌天正十年二月十八日光源氏物語竟寫連歌一卷（正保三年）○狂歌白德百首一卷（寛永十三年）○俳諧新增大筑波○御幸（各別項）○百詞自註一卷（萬治二年）○前車（其他）龍恩記（歌林體略集）（別項）○白德翁乃記一卷（慶長十年）○白德文集二卷。

【葉韻】白徳の學風は、時代の關係上啓蒙的ではあつたが、江戸期の初頭に於て指導的な地位に立ち、また堂上家の學問を民衆へ移す橋渡しをもなした。俳諧に於ては、和歌・連歌の附庸的なものと見る考を脱し得なかつたけれども、兎に角、俳諧を中心興して白阿（別項）の鼻祖となり、「やさしきを體として、をかしきを用とす」（五くしき）と云はれる俳諧を打建てた。ただ併言（本連歌に用ひないやうな俗語・濁語）のあるを以て俳諧とする形式主義に傾いた爲めに、言語の洒落に附する俳風たるを免れず、門人中にも異説を感じる者を生じた。又、俳諧の確定的な式目がなかつたのに、俳諧の式目を制定したのも彼の功績で、寛永二十年の彼の「袖摺」（別項）に附録した十首の式目歌がその最初のものであるが、「御幸」（別項）に於てこれを詳細にしたのである。連歌の式目を多少緩めたものであつたが、なほ窮屈を免れぬもので、そのためには異説があり、遂に談林（別項）の反動を呼ぶべきものでもあつた。

【参考】延陀丸おとし文○白徳翁乃記（貞寧○

片こと同上○藤原惺高系譜錄屏○惺高先生行狀遺事○尺五堂先生全集題有○與白集長子○詩話作者名寄理算○京極泥赴奉時○高利二重林鴻○貞徳水代記 鶴波○あらむつし林鴻○花見草趣士○頬柑子其角○御幸松○歎世說開更○翁草又調○詩話家譜文石○詩詠世說開更○翁草又調○詩話家譜後拾遺集十○歌俳百人撰高鶴○詩話家譜後拾遺集十○小夜話五鶴○俳家奇人談玄々一○閑田耕所著元○詩家大系圖春明○野史忠道○松永貞徳の俳諧(關客道)○松永貞徳の父祖について藤井乙男(江戸文庫研究)○貞徳傳の吟味+田義秀(關音昭和六・七年)
〔志用〕

貞徳水代記 ていとく 俳諧傳 五冊
【著者】中島隣流【名稱】詩貞徳水代記【名義】詩貞徳の俳徳を水代に傳へようといふ意味から、かく名づけたものであらう。【刊行】元祿五年三月【講本】俳諧系譜逸話集(日本俳書大系)に所収。【解説】福江林鴻の「京極二重」(別項)に對する雅書である。林鴻が「京極二重」に、京中の點者十三人に賞美の跋を書かせ、同書が貞徳の名を借りて「御幸」(別項)逸話集の新式を立てた事は、貞徳正俳の隙りであるといきまき、元祿四年十月二十一日林鴻と其筒屋庄兵衛冠に同書の絶板を申込んだ處、赤田重徳の仲裁で隣流及び門弟五人の句を削らせて、事件が一旦落着したが、隣流がこれを黙止しないで本書を著作したのである。巻頭に詩詠あらはし衣と題した絶板申込狀や、本書刊行の由來を述べた文を掲げ、その次に松永貞徳正詩之系譜傳來を掲げてゐる。卷之一には貞徳系譜傳來を掲げてゐる。卷之一は

御會・洛東妙淨の評論之會・西武の萬葉評論等
がある。卷之二は同じく鈴師傳記で、貞門・
講仙の品定めを主とし、その他の俳人の品
に及んでゐる。卷之三はこれも鈴師傳記で、「
心居士夢物語と京羽二重評判なる「京羽二重
の自叙の評判及び各點者の句の評判を收め」
卷之四はその續きの京羽二重評判で、二卷
の各點者の句の評判である。その末に隨波
自跋及び洛山道人の跋がある。押納が二十
葉ある。「價值・影響」貞徳の傳記及び七詩
の傳記や當時の俳諧上の事實を知るには卷之
になるものの一つである。併し隨波は西武
門人に過ぎないから、貞徳の傳記や貞徳當
の事實の傳へには誤りが少くなく、又師の二
武を大ならしめるために、筆を曲げた所が
り、一體に敵本主義のものであるから、十二
の注意を要するものである。それ故、同年
才勝門の只丸は「足圍」(足圍)を著して本
を難じ、林鶴も亦翌六年「あらむつかし」を
して本書を反駁し、本書の虚構誤認を指摘
してゐる。



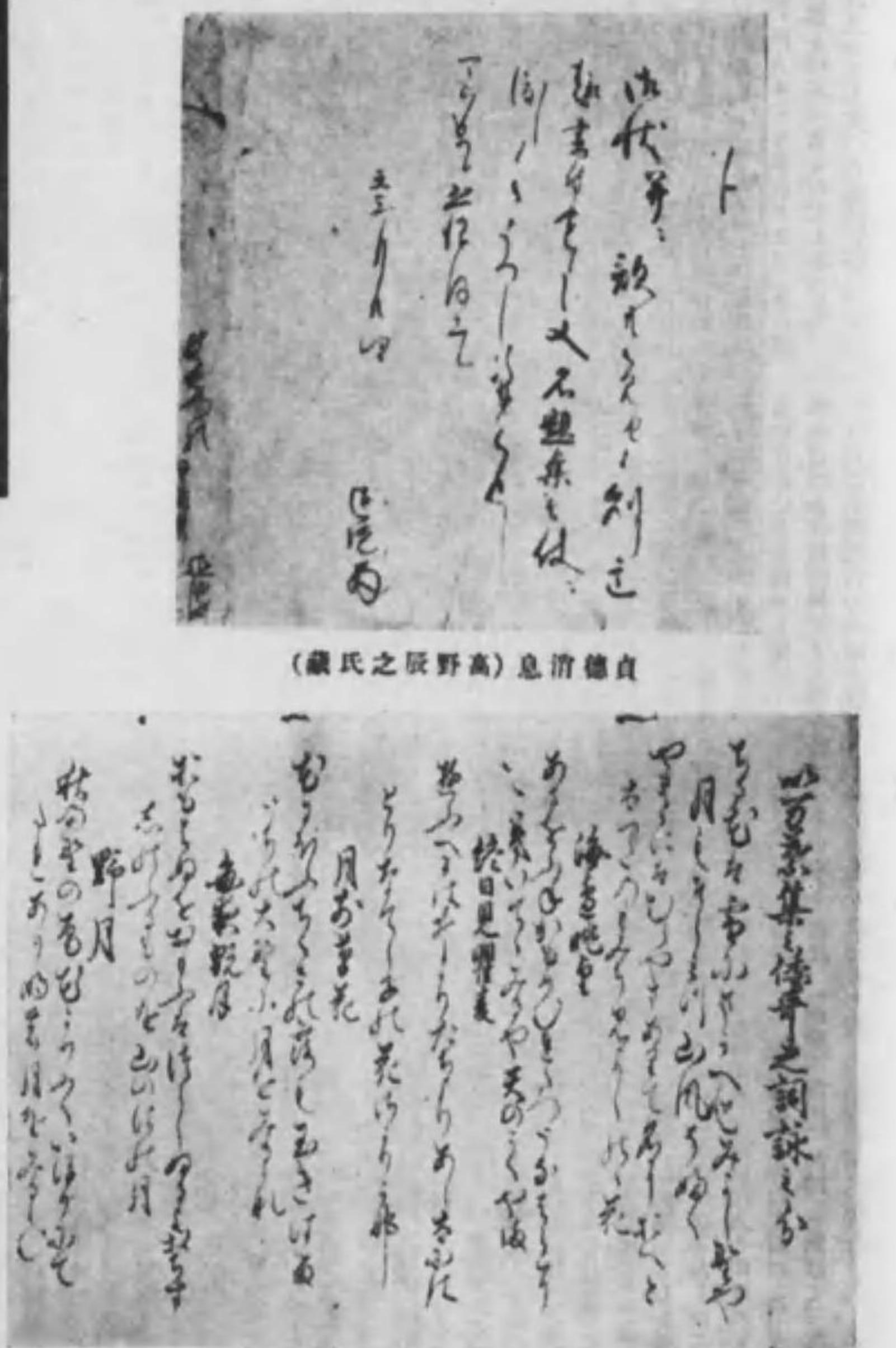
(藏寺相實羽鳥上都京) 像肯德直



(寺相實)碑墓德貞



(藏氏之辰野高) 踏筆德貞



(藏氏綱信本佐佐) 跡筆德貞

【南門】もん 俳諧流派。【名稱】自徳(別項)の門派を謂ひ、俳風の方よりは古風と解する。
【性質】自徳の作風は「やさしきを體とし、をかしきを用とす」(玉くしけ)と稱せられてゐるが、彼は俳言(本道歌に用ひないやうな俗語濁語)のあるべきことを俳諧の基本としたので、想よりも形が重きを置かれる傾向となり、即ち言語の洒落が重きをなすものとなり、實は「をかしきを體とし、やさしきを用とす」と云ふ方が當るやうな作風であつた。この風調は彼の門下の一様に遵奉する所であつたが、併し中には貞徳が形式方面に重きを置き過ぎることを感じて、今少し内容的に考へようとする者もあつた。徳元や重徳(各別項)などがそれであつたが、特に重徳はこの點に於て最も過んだ考へ方をして、「脚俳諧にて心の連歌なる句」「俳諧の趣なくして思入の連歌なる句」(毛吹草)のあるべきことに氣づき、即ち内容は必ずしも用語によらない點に氣づくに至つた。貞徳は又連歌の式目(別項)に準じて俳諧の式目を制定した。その式目は連歌の式目を多少變めたもので、南門の徒は一體にこれに準據し、後に至るまでも水く各派に亘る基準となつたが、併し窮屈を免れぬものであつたので、談林や蕉風(各別項)にあつては、必ずしもこれに拘泥しなかつた。俳諧を中興し、基準となるべき式目を與へた事は、貞徳の功績であつたが、貞徳風の俳諧よりはもつと内容的な俳諧となり、南門の式目の窮屈さをも感じた談林から、直門の俳風は古風と稱せられるに至つた。【沿革】南門の中心勢力は上方であつた時代は、寛永十年に重徳の「大子集」(別項)などの出た以後、正保・慶安・明暦・萬治を経て漸次、東西の諸國に普及した。その隆盛であつた時代は、寛永十年に重徳の「大子集」(別項)などの出た以後、正保・慶安・明暦・萬治を経て

寛文の頃までで、延寶頃には「當世の才たりも
の」の中に數へられた。併し、點者としての勢
力は元祿以後までに及んだ。直徳には優れた
門人が多く、その中、安原貞室・鶴冠井合徳・山
本西武(各別項)等は忠實な門人で、故參の野ヶ
口立圓・松江重輔(各別項)は不和であつた結果
直徳から疎外されたが、重輔の過んだ考は談
林の祖の西山宗因(別項)に影響する所が多く
つた。延寶の切、宗因の談林風が勃興するや、
西武門の中島龍流(別項)が古風の類勢挽回に
努めたが意の如くならず、直門の諸哲の談林
化する者が多く、古風は愈々凋落の色を見せ
た。江戸の直門は德元等五俳哲(別項)によつ
て開拓されて來たが、これも延寶三年、田代松翁
(別項)の「談林十百附」(別項)が出るに及び、始
盤を覆され、要節する直門の諸哲と共に談林
風が盛んになつた。四方の形勢益々古風に非
であつたが、併し談林も一時の風潮に過ぎな
かつた。直草・元祿に至り、季吟門の芭蕉が芭
風(別項)を樹立するに及んでは、直門・談林も
間はず、これに化せられる者が多く、時と共
に芭風が勢力を得た。元祿以降の直門は、直
徳の「御幸」、立圓の「はなび草」、季吟の「山之
井」(各別項)等を本として、法式・季題の俳學者
たる地位を占めるに過ぎなかつた。立圓門の
青木覺水の「詩話新式」・重輔門の源方山の「山
山集」(各別項)、直宗門の相澤貞山の「俳諧平批
體」、良保系の溝口竹亭の「をだまき御目」(各
別項)等は、その著名なものであつた。溝和連句も立
文の間、立圓系の高田幸佐を初めとして、收
盛門の齊藤如泉、松堅門の爪木晚山、如泉門
の四時堂其謙等が傑出した。寶曆切、安解門
の早川丈石が「詩話家譜」(別項)を著し、京文

心の向」の傳承を示した。この方面の著作は、すでに寛文頃、朝江種實の「訓詁作者名考」が、あつたけれども、粗略を免れぬものであった。丈石の家譜は印譜まで附して貞門點者の盛容を示してゐる。次いで明和に貞守系の木十口が「家譜拾遺」を著し、宣政に、なほ「家譜拾遺」を著してゐる。天保頃、貞門七世の道統を継ぐ天來が「説詁七草」を著して梅屋の併詁を攻撃し、聊か貞門・尾の氣勢を上げてゐる。【研究史】 脇波の「貞柳水代記」、許六の「歷代佛傳傳」、白露の「説詁」、樺川の「併詁獨釋古」等に簡単な記述はあるが、粗略だつて、捕まつたものは明治以前にはない。明治以後の併詁史の研究が勃興してから、貞門古風の併詁の研究も組織的となつた。即ち大野酒竹の「併詁略史」、佐々木雪の「連佛小史」以来のことである。

【参考】 訓詁作者名寄朝江種實○貞柳水代記
鳥居茂○歷代佛傳傳川許六○併詁太平記
藤井生○般若葉阿彌陀○訓詁家譜早川文石○
説詁家譜拾遺集 青木十口○説詁家譜拾遺
同上○説詁白露○併詁獨釋古 谷口樺川○
家大系圖 生川春明

貞柳翁狂歌全集 ていりうをうき やうかせんしょ 狂歌

第一册 「制者」無心亭右耳 「刊行」文化
年 【解説】 油野齊貞柳の家集「家づと」「翻
づと」「拾遺家づと」「机の塵」「置土産」「今は
かし」その他の諸書より貞柳の狂歌を集め、狂
題として一冊にまとめたもので、前記の諸書
散見する煩なくして、貞柳の歌格作例を知
り便りよきものである。取むるところの歌
千三百五十餘首、附錄として「狂歌大概」「
收起講」「鳩の枕序」「三豪追慕狂歌序」「有馬
の記」等を掲げてある。

手鑑てみ 書道【解説】古人の筆蹟、多くは断片を蒐集し、これを帖などに作り以て鑑定の対象とすると同時に、鑑定の準據としたものを云ふ（書の外に繪画・布帛などを集めたものもある）。筆蹟の鑑定は平安朝頃から漸く盛んとなつたが、室町時代、特に東山時代以後茶の湯の流行につれて、古書寶の需要が多くなり、偽作も盛んになつて來た。隠つて必然的に鑑定が重要視され、遂に豊臣時代に至つて古筆家と云ふ筆蹟鑑定専門の家柄を生ずるやうになつた。その祖は近江の人、平澤彌四郎範佐入道了佐権材と云ひ、近頃前久の信用を得て、古筆鑑定を業とし、豊臣秀次から古筆の姓と琴山の文ある鑑定用の印とを賜つた。了佐の子孫は代々古筆姓を名乗り、鑑定の證明書、即ち折紙・證狀・拂札を出してゐる。江戸時代には、この外にも鑑定専門家はあつた。これ等鑑定家の標準は手鑑に據ること多く、彼此を比較して真偽を定めたものであるが、所收の筆蹟は玉石混淆であつた。而してこれ等の筆蹟、謂はゆる古筆切（別項）には種々の名稱が冠せられ、有名なものは、名物切れとして尊重された（古筆名跡集・新編古筆名跡集等）。手鑑は、かくして古筆家の手に依つて豊臣時代に發生し、廣く世に行はれ、江戸時代には木版のものさへ出來、また輸入道具の一つにまでなつた。

100

である。即ち太夫・三味線は本來座内乃至樂屋内の小高き床で淨瑠璃を語るのが原則で、聽衆看客の前へ、語り手たる太夫が置はれて見臺を前にして語るのを「出語り」と稱して、特殊なる形式とされ、「出語り」といふ言葉が生れた。即ち昔の人形淨瑠璃の舞臺構造が、前面に人形舞臺「手相」があり、正面奥上段に太夫の語り場があつて、簾が下げてあり、その面の語り場があつて、簾が下げてあり、その夫の語り場があつて、簾が下げてあり、その内で語つたものである(舞臺の舞臺參照)。「出語り」の形式が、舞臺の構造に影響し、太夫・三味線の床が、正面奥の上段から、乃至至樂屋から、後世に見るが如く、上手横に斜に設けられたのは、竹本座にあつては享保十三年五月の「幕原合戰」から(慶應二十五年)上松竹座では享保十九年正月「北秋時舞」の二度目の上演から(舞臺參照)である。この横床に直されてからは、「出語り」といふ事實も言葉もなくなり、人形淨瑠璃の太夫は、殆ど悉く「出語り」が原則で、「晉原」の寺入り、「忠臣蔵」の逆物、城波・濃翁羽・雪こかしなどが、簾内で語るのを常式とするといふ反対の慣例が生るゝに至つた。

テカダンス 「解説法」を見よ。

手相同押にかか 「喜三二」を見よ。

當禮八幡祭

はなせつき

脚本

七幕十四

場

お家作話物

【作者】四代鶴屋南北(通称)

風流慈愛屋の姫歌(名曲)

八幡に双蝶々の

書き者へを表して、實のり時と祭の時候を暗示した名題。【別名題】花菖蒲山崎二豊(通称)

山崎(幕本)大南北全集第五卷・日本歌舞全

集第十二番所收。【興行】文化七年八月十七日江戸市村座初演。

(作詞) 山崎昇與次兵衛・勘定の甚兵衛(五代勘本卒

脚本) 墓木次郎右衛門・勘定の甚兵衛(五代勘本卒

石井飛騨・伊藤出羽の芝居の権が並んでゐて、これによつて觀ると、機巧と手妻とを殆ど同義に用ひてゐる。寶永二年十一月、竹本座は筑後病氣のため、新に竹田出雲が新座主として臨んだ。その初興行「用明天皇職人體」で、鍵入の段に、をやま人形辰松八郎兵衛が初めて人形の出遣ひをしたが、竹田の芝居の機巧をもこの興行に持ち込んだ。これが手妻人形で、をやま人形が蛇體となる仕掛けがあり、辰松八郎兵衛が造つてゐる。

【参考】音曲道智鶴○佐佐鳥日記○歌舞妓始○椿葉笑聲○用明天皇職人體井田男長日解題○人形道茶請○許多脚色帖

【石川】鐵幹鶴「東洲野対」を見よ。

【鐵研餘滴】よげん 隆華 四巻 [著者] 齋藤正謙(監修) [刊行] 安政元年 [解説] 和

漢の史書を博覧した際、舍心の事項を摘録し

て論評を加へたもので、經史子集に亘つてゐる中にも和漢史傳の逸話が多く、漢詩文に係る事がこれに次ぎ、何れも兩國相似の談などである。

【参考】音曲道智鶴○佐佐鳥日記○歌舞妓事

始○椿葉笑聲○用明天皇職人體井田男長日解題○人形道茶請○許多脚色帖

【石川】鐵幹鶴「東洲野対」を見よ。

【鐵研餘滴】よげん 隆華 四巻 [著者] 齋藤正謙(監修) [刊行] 安政元年 [解説] 和

漢の史書を博覧した際、舍心の事項を摘録し

て論評を加へたもので、經史子集に亘つてゐる中にも和漢史傳の逸話が多く、漢詩文に係る事がこれに次ぎ、何れも兩國相似の談など

を交へ、すべて達意の漢文で書いてある。和

書については六國史などから引用した事項

が少くない。弘化元年著者及び喜水四年著者

の男正格の兩序がある。所刊は甲集四巻のみ

である。

【和田】和田

著者] 田中王堂 [刊行] 明治四十五年、東京廣文堂。【解説】王堂は前年『新舊より街頭』

を出版し、評論家として一派の地位を占めた

が、本書によつて更にその存在を高められました。上巻には、現代生活の意義「印象主義より象徴主義」の如き法宣すべき論文がある

が、その著の最も大なる部分を占めるものは

「岩野泡鳴氏の人生觀及び藝術觀を論ず」である。

【参考】近世邦樂年表(萬葉之巻) [著者] 小町(玉だら)・座頭・沙波・浦島・切糸・石橋と組合せた七樂花所作事の一。

【参考】國語學「名譽」天爾遠波。 [著者] 日爾波・手爾尾聲・手過手波など書く。「辭」の字を宛てる事もある。又「てには」とともいふ「手爾葉・手耳葉・出爾葉・出葉など書く」。

【解説】他の語に附いて、その意味を助けるものをさして云ひ、その範囲は必ずしも明瞭でないが、助詞、助動詞、活用語の語尾、接尾などの類を含む。大根文彦博士は、これを品詞の一つの名とし、今の助詞と同義に用了た(第日本文典)。

【研究史】この種類の語は、漢文を讀む場合、又は漢字を以て日本語を寫す場合に特に加へて讀み又は書くべきものとして、古代より我が国人の注意をひいた事はないが、漢文讀の符號として手古止點(羽張)が用ひられてゐる事は、儒家の用ひた手古止點の名の語をあらはす事となつたので、手古止點によつてあらはされるこの種の語を總て「てにをは」と稱するやうになつたものらしい。

「てにをは」の名は、儒家の用ひた手古止點の四隅の星點(單點)を、四葉の點のやうに、左下から順次に讀んだ稱である。てにをはが作歌に大切である事は、既に鎌倉時代に於て唱られたが(八雲の歌、阿倍尼の歌口傳など)、吉野・室町時代に至つて、「天爾葉大抵抄」や「てに口傳」などが作られて、歌に於ける詞の

びの振、次いで苔の花の響心を語る可憐なこなし、やがて源成寺の懇の手習めいた手跡から、日傘を使つて早目の踊りで終る。曲振とも、いかにも江戸の早熟の頗らしい氣分をよく現はしてゐる興味が深い。小町(玉だら)・座頭・沙波・浦島・切糸・石橋と組合せた七樂花所作事の一。

【参考】近世邦樂年表(萬葉之巻) [著者] 小町(玉だら)・座頭・沙波・浦島・切糸・石橋と組合せた七樂花所作事の一。

【哲人主義】じゆじん 論文集 二巻 [著者] 田中王堂 [刊行] 明治四十五年、東京廣文堂。【解説】王堂は前年『新舊より街頭』

を出版し、評論家として一派の地位を占めた

が、本書によつて更にその存在を高められました。上巻には、現代生活の意義「印象主義より象徴主義」の如き法宣すべき論文がある

が、その著の最も大なる部分を占めるものは

「岩野泡鳴氏の人生觀及び藝術觀を論ず」である。

【参考】國語學「名譽」天爾遠波。 [著者] 日爾波・手爾尾聲・手過手波など書く。「辭」の字を宛てる事もある。又「てには」とともいふ「手爾葉・手耳葉・出爾葉・出葉など書く」。

【解説】他の語に附いて、その意味を助けるものをさして云ひ、その範囲は必ずしも明瞭でないが、助詞、助動詞、活用語の語尾、接尾などの類を含む。大根文彦博士は、これを品詞の一つの名とし、今の助詞と同義に用了た(第日本文典)。

【研究史】この種類の語は、漢文を讀む場合、又は漢字を以て日本語を寫す場合に特に加へて讀み又は書くべきものとして、古代より我が国人の注意をひいた事はないが、漢文讀の符號として手古止點(羽張)が用ひられてゐる事は、儒家の用ひた手古止點の名の語をあらはす事となつたので、手古止點によつてあらはされるこの種の語を總て「てにをは」と稱するやうになつたものらしい。

「てにをは」の名は、儒家の用ひた手古止點の四隅の星點(單點)を、四葉の點のやうに、左下から順次に讀んだ稱である。てにをはが作

た(第日本文典)。

【参考】國語學「名譽」天爾遠波。 [著者] 日爾波・手爾尾聲・手過手波など書く。「辭」の字を宛てる事もある。又「てには」とともいふ「手爾葉・手耳葉・出爾葉・出葉など書く」。

【解説】他の語に附いて、その意味を助けるもの

をさして云ひ、その範囲は必ずしも明瞭で

ないが、助詞、助動詞、活用語の語尾、接尾などの類を含む。大根文彦博士は、これを品詞の一つの名とし、今の助詞と同義に用了た(第日本文典)。

【参考】國語學「名譽」天爾遠波。 [著者] 日爾波・手爾尾聲・手過手波など書く。「辭」の字を宛てる事もある。又「てには」とともいふ「手爾葉・手耳葉・出爾葉・出葉など書く」。

【解説】他の語に附いて、その意味を助けるもの

をさして云ひ、その範囲は必ずしも明瞭で

の所謂「結辭」に對してである。「紐鏡」に於ては三轉（終止・連體・已然）四十三段に歸したが、義門はこれを五轉とし、第一轉特然言、第二轉連用言、第三轉既^{アリ}然言、第四轉連體言、第五轉已然言と命名し、次に「使令」と名付する一段を置いた。この六段の分け方及びその命名は、春庭の「詞八衛」（別項）に於ける「四段の活」「下二段の活」等の分類・命名と共に、國語學史上、特筆大書すべき事である。また「友鏡」では、「紐鏡」の四十三段を増訂して五十二段とし、活用語の凡ての形を網羅した。因みに義門は「友鏡」を更に訂正して「和語說略圖（別項）」を著した。大田豊年の「紐鏡中之心」（二卷）は、上巻は「紐鏡」を註解したものである。下巻は「詞の玉緒」の註。嘉永元年三月附で鈴木重胤の序がある。刊本。横澤飲河の「紐鏡傍註考」一巻は「紐鏡」の略解とも見るべきもの。附錄に、活用しない結辭を「詞の玉緒」から抄出して掲げてある（文化十三年の寫本）。殿村常久の「かたばみぐさ」一編（文政十三年刊）は、「紐鏡」「詞の玉緒」「詞八衛」の三書に依つて、手稿平波のとゝのへと、言葉の活きを圖にしたものである。（詞の玉緒參照）

〔西田〕

てには網引網^{ひきつな} 研學書 二巻

二冊【著者】相井道敏【刊行】明和七年九月。
後「細のすがき」（二冊・道敏著）と合冊して「詞のあきくさ」（四冊）と題して文化十一年四月刊。

【内容】てにをはに關する研究である。上巻には「て・に・を・は・そ・こそ・と」以下を、下巻には「けり・ける・けれ・けん・き」「なり・なる・なれ・也けり」以下を擧げて、一々意味、用法を説き、古歌を例證に舉げてゐる。最初に、「てには」といふ語の起源に關する從來の説（「出價説」であるとするもの）を附會であるとし、漢文

に附した平古止點(別項)の四脚にあるテニス
への四點から出たものであると主張し、定家の著といふ「てには大槻抄」(別項)の偽書であり、又「春樹顯福抄」(別項)の信用し難い事も述べてゐる。終りに「てには用意の事」と題して、近代のてにはの諸註に、てにはといつてゐるものの中に「唯」「猶」など、詞を混じてゐるのを理なき事とし、かゝる社撰なる説を解傳とする事をかたはらいたいと評してゐる。
【價值】本書は「てには」研究書としては宣長成章以前のものとしては最も優れたものである。研究の態度は自由であり批評的であつて他の説にとらはれず、從來尊崇せられた諸説をも斥け、新説を出してゐる。さうして語彙口訣の類を學問衰微の因として挙げてゐる。著者の「てには」の語源説は卓見であつて、語義界の定説となつた。又てにはと詞とを區別した事、本文中に、てにはの活用しないものの(今助詞の類)と活用するもの(今助動詞の類)とを區別して舉げた事(多少混じたものもないではないが)も注目に値する。又活用するものには、「けり・ける・けれ」「なり・なる・なれ」の類をあげて呼應を示してゐるが、これをなほ一步過めれば宣長の「經鏡」や「詞の玉緒」(各別項)の如き係緒の研究となるものである。要するにこの書は、てにをは研究史上、特筆すべきものである。

本書は、全部漢文で記されてゐる。「手觸大概抄」には、全字數六百四十三字と記されてゐるが、現存のものは六百四十八字である。先づ歌詞の草碑は手觸波に依つて定まる。觸波を巧みに用ひれば、鬼神も感涙を流すのであると説き、云ひ切らざる手觸波を點句に置く法。「つゝ」「こそ」の用法。「やは」は疑ひ・願ひ・推量等十種の用法があること、「そ」の用法。「か」には、疑ひと哉の意とある事。「制字」(ん・む)の用法。「かは・やめや」の用法。「も」「かも」に二種の用法を事。「かな」に、願ひ・治定等六種ある事等をしてゐる。【價值】本書は、手觸手波について記した書の中、最も古いものの一つである。本書は詠歌の福傳として出来たもので、その内容は學術的には必ずしも高い價値を有するものでないが、この種の研究が漸次進んで手觸手波の呼應、活用の研究となつて行つるのである。即ち本書は、「姉ヶ小路式」(別項)と共に國語研究の一つの源泉となつた點に歴史的價値を存するものである。

【末書】「手觸波大概抄之抄」一巻一册、宗著。宗祇の奥書は文明十五癸卯正月十八日あるから、その頃の作と思はれる。初めに「手觸波大概抄」の本文を掲げ、次に本文を一句つ出して、逐條本文の大意を記し、古歌をいて説明してゐる。「手觸波大概抄」を見るは、必ず参照すべきものである。

【備考】「群書一覽」に採録した寛永二年刊の「てには大概抄」は、本書と名は同じですが、内容は異なるものである。

手触明てつめい「最へ唱」を見よ。

寺小屋てらこや「音韻傳授手習體」を見よ。

照葉狂言てうりやうげん「舞踊」[異形]て

はきやうげん。【意義】テルハの語義は明かでないが、俄狂言・茶番狂言の變化したものである。【解説】『照葉狂言約子定木』より一例として、「末廣」をとつて考へて見る。初め本行通りに行き、大名が體を立て、太郎冠者が禪子物にかかるや、先づ大名の櫻姫を直さんと、太十の「こゝに刈取る眞柴垣、夕顔棚の此方より」と、義太夫を語つて大名に怒られ、次には「黒髪の結ぼほれたる」と地囁を唄ひ、益々叱られ、次に本行通り「傘をさすなら春日山」を歌つて大名の櫻姫が直り、相撲となつて、傘の縁で住吉踊になつて終る。樂屋では三味線も彈くのである。【曲目】『照葉狂言日和臺藏』(渡川老人作、刊年不明)『照葉狂言約子定木』(中井恒次郎編、明治十六年刊行)等によるに、前者は後者より古作を集めたらしく、末廣・花盜人・隠し狸・蝦牛・釣狐・入間川・葉平餅・福の神の八篇。後者には富士松・雷・萩大名・花折・末廣・駄猿・二十九十八・腰斬・拔戻・三人片輪・薩摩守の十一篇を初・後編二巻に、それより收めてゐる。【起源】『守貞漫稿』雜劇下に、「嘉永の比、大坂の源子等四五輩相議て始めて行之。其行は単樂家の間の狂言と云へる物を大體とし、衣服にも素抱上下等を用ひ、又狂言師の大筋繙の服、乃ち古の駄斗目也、着之俳優のさまも做し之。言語も擬し之、而て往々富世の踊り及び芝居狂言、又は俄狂言に似たることをも交へ行ふ。安政に至り江戸に下り、諸所の寄せ席へ錢を募り、行ひ之て群衆あり」とある。江戸へ下つたのは安政三年で、「武江年表」のその條に、「大阪トリ新十郎・秀三郎・光之助・仙太郎・雀三郎・彌一郎・虎十郎・新玉などいふもの、照葉狂言と號し、能の間狂言により歌舞伎狂言の所作を交へ、所々に於て

興行せし。見物多かりし故、江戸にても之をまねびしもの多かりけれど、いづれも拙かりし」とあるが、一座中で若手の花形片岡秀三郎は、頭も出来て愚鈍の客も頭からす付いたといふ。【沿革】「日和嘉藍」の作は、本行の能狂言から、わづかに暗示を得るに止まり、俄狂言・茶番狂言の面影が多分であるに比し、「約子定木」の方は可なりに本行に近く、而も茶番狂言もあくどい。思ふに前者は照葉狂言の古態であり、淀川老人作であるも、或は脚本の意味であらうか。明治初年には、京阪・名古屋に行はれ、英説の女優も加はり、道成寺その他の能樂をも演じて、こゝに三度の興演があるが、それを最後として亡びたのは、元來が獨立性のないものだからであらう。【小寺・飯塚】
照葉狂言 てりはり
かうげん 小説【作者】泉鏡花
【發表】明治二十九年十月、讀賣新聞連載。【刊行】三十三年四月、春陽堂。雑花全集第二卷
〔日本小説文庫〕所収。

【梗概】貢は両親を失ひ、伯父の家に引取られてゐる身の上、眞向ひの廣岡の娘お雪も、邪慳な繼母に育てられるはかない身の上、お雪が貢を又なきものに思へば貢も亦お雪を姉のやうに慕ふ。たまく近所の廣場に照葉狂言の一席がかゝり、貢は毎晩見物に行く。一座の若師匠小親は、色白く髪黒き少年の客を一夜様數に招いて解説したが、歸途恵太郎共に襲はれるのを匿つて家まで送り届けると、それは貢であつた。恰も伯父の一家は暗障の現場を踏み込まれて、伯母は目前で警官に引立てられて行く所であつた。全くの孤兒となつた貢は、その夜から小親に養はれて一座する身となつた。諸國を廻つて八年後、小親の一座は興行のために再び貢の故郷を訪れる。貢

にとつては、別れても忘れ得ず、日夜懐しく想つてゐたお雪が、殘忍な姫姫子のために虐遇されてゐる故郷である。その氣の毒な境遇と小親の愛情に昵む我が身を比べ省みて、そのままあるに堪へられず、思ひ餘つた聯句、せめては救ひ得ぬお雪の悲運に報いんがため、小親をも永久に捨てて、夜半密かに一人山路を越えて行く。

【解説】作者自身の言葉に依れば、この作品は森鷗外譯「即興詩人」(別冊)にヒントを得たものださうである。少年の遺瀕なき純な思想の情、女藝術人の義理人情、それ等は「晉之巻」(別冊)と同じじく、浪漫派の詩人にとって哀切なる詩材であつた。作者の一特色である色彩豊かな繪畫美は、清新な筆致と相俟つて、この一篇を一層豊麗な物語にしてゐる。(水上・平松)

『鶴虎配』はづか 『信州川中島合戦』を見よ。

照日葵てるひのあ 紀念小説 【作者】須藤南翠【角書】表題に「歴世悲歌」と冠されてゐる。【發表】明治十九年一月より四月迄改進新聞に連載。【刊行】同二十一年七月春陽堂。

【梗概】慶應年間、陸奥の名取に城を構へた大領治邦は、その妻淺香に子がないので、一戸治部の妹松島を容れて室とし、治家を設けた。ところが、その後に本妻の淺香が糸萩姫を生んだので、波瀾が起るものとなつた。兄の治家は性質温和であるが、妹の糸萩は男まさりで、幼時から武術を嗜んだ。個々治邦はその臣下から成る幕軸を獻上され、家中の者に讀ませてみたが、誰も分らなかつたので、「この字を読み得る者には最愛の姫を與へよう」と云つた。ところが、藩のお龍師で、忠誠の士と云はれた大輔段左衛門の長男主税介(忠良)が、見事にそれを読み得たので、治邦は感貫

し、約の如く姫を主税介に與へ、その姫と
めたのである。日ごろ姫に思ひをよせてゐ
一戸治部の長男民部は心中甚だ穢かならず
叔母の松島を勤かして、姫を自分のものと
ようあせつた。それで彼は一計を案じて
大館一家のことを調したので、段左衛門は
領主の不興を蒙つて流謫せられ、悲憤の中
自刃した。主税介は復讐の念燃ゆるが如く
姫と別れて江戸に上つた。民部は姫に再嫁
勧めたが、姫は聽かず、物かに男装して主
介のあとを追うて江戸に上つた。時に主税
は敵方の刺客の害を免れるため、女装して
の同志を糾合することに力めてゐたが、捕
られて下總の法羽村に幽閉せられた。が、
を見て抜け出し、宣節及び同志と協力して
多賀石見・一戸民部、その他を攻めたが、敵
奸計に陥り、糸萩姫は高橋につるされて燒
された。主税介等はなほ屈せず、暴風雨に
じて襲撃し、地雷火を爆發して逆臣等を殺
した。

【批評】詩本式・草體紙式の特色を取合せて
事件の奇を以て讀者を動かさうとしたところ
に興味がある。が、不自然、誇張のあとの
いのを遺憾とする。
〔著者〕宮島春松〔角書〕小説「原作」佛國
十七世紀の哲人フニヌロン（フランソア・ド・サ
ニヤック・ド・ラモット）（フニヌロン）の著「テレマ
ク冒險譚」〔刊行〕明治十二年五月—十三
六月迄に既刊八冊（確定三十六冊）。

【解説】古ギリシヤ神話時代の英雄ユリシ
ズ（オデッセウス）の子テレマカスが、父を尋
て師マントルと共に漂泊の旅にのぼり、人生の經
所方々で種々な苦難災厄に遭ひ、人生の經

を書めつくして父に廻りあひ、共に故郷に歸ることを骨子としたものである。原作は著者
フニヌロン三十八の時、時の佛王ルイ十四世
から王孫ブルゴオニエ公の傳育官に任命さ
れ、公に帝王の道を授ける教科書としてこの
小説を書いたもので、テレマカスの冒險的經
験に託して別切な譬喻と高雅な手法で巧に王
者の體を述べ、併せて政治・地理・歴史を趣味
深く學習せしめるのが主眼である。だがかゝ
る意圖で書かれた寓意小説であるに拘らず、
フニヌロンの天才によつて文學上の價値も極
めて高いものとなつて居り、今日の佛蘭西文
學史家も、これを近代文學發達以前に於ける
最も興味ある小説五六の中に數へてゐるとい
ふ。譯文は遙字譯を潤飾した禮麗なもので、
馬琴流の七五調を基調として朗々語するに足
るものがある。この點で明治初期翻譯中第一
位を下らない。第一巻には假名垣魯文闇、三
浦義方校となつてゐるが、第二巻以下三浦の
名は見えない。なほ明治初期に出た「テレマッ
ク冒險譯」の譯譯で有名なものは、この外に、
明治十六年刊の「經世指針」、「奇談」がある。四六
洋裝一冊で、第五編で終つてゐる。譯文は遙
字譯である。作者の意匠を害すまいとしたと
譯者は斷つてゐる。原文尊重の意味を窺識的
に態度に示した最初の譯譯として注意すべき
ものであらう。譯者伊澤信三郎は信州高遠の
人、伊澤修二の弟である。

として佛式兵書の譲述に従ひ貢獻する所があつた。この間雅で嗜好してゐた雅樂の研究に努め、舞樂共に斯道の奥義を極めたが、古樂の不振に發憤して、國樂制定の説を唱へ、雅樂を以て日本國樂とすべしとの論を持し、遂に陸軍將校官の職を辭して雅樂協會を創立した(明治二十五年)。爾後多方苦心、新曲新舞を製作し、東京に於て公演すること十數回に及んだが、経費不如意のため廻りに引退し(三十一年の夏)、時代雅樂協會を起した。これは今日なほ現存してゐる。

儒偶用心記 (著者) 月堂草子 五冊

【作者】月堂草子 [刊行] 寶永六年 [名稱] 開水の「晝夜用心記」にならつた命名であるが、



（藤氏館太久田小） 記用偶儒偶

【作者】月堂草子 [刊行] 寶永六年 [名稱] 開水の「晝夜用心記」にならつた命名であるが、

【作者】月堂草子 [刊行] 明和十年刊行の「晝夜用心記」がある。同書は、名著文庫二十

九篇に收められてゐる。【解説】書名のみでなく、内容形態とも「晝夜用心記」を模倣したものである。内容より見れば、儒偶の意は廣く、單なる詐偽取財などを意味してゐない。

但し説話の最も多數はそれ等の類である。中には武士菊村翁右衛門の子袖之助(十五歳)が、

同僚松崎村太夫の子小太郎(十三歳)のために討された。すると村太夫は家来勘八をして小太郎を菊村方に同行させ、御子息の敵なれば存分にせられよといはせた。勘八は途中から

小太郎を背負うて出奔したので、菊村方でもせん方なく、世間では義を重んじた村太夫の處置を稱揚した。房がこれは、實は村太夫が皆起きた。そのために頬悔と新參手代今右衛門との密會が露はれた。然るにこの今右衛門と梅とは懇仲で、今右衛門は歷々の町人のたといふ人情に基づく策略もある。又地獄があつたので、玉井屋光右衛門の宅でも

處處を稱揚した。房がこれを、實は村太夫が結婚させられたといふ懸け引もある。又遊女を身請しようとした男が、毒薬心中を申出で、女が薬を飲むのを見て、その心を確めて身請けした話もある。かく單なる詐欺の手段の面白さばかりでなく、廣く社會の諸方面に亘つてゐるのは、かゝる類の書としては罕

て身請けした話もある。かく單なる詐欺の手段の面白さばかりでなく、廣く社會の諸方面に亘つてゐるのは、かゝる類の書としては罕

く取るべき所であらう。

天隱龍傳 (著者) 龍潭 を見よ。

【田園の憂鬱】 (著者) 佐藤左夫 小説 【作者】佐藤左夫 [成立] 刊行 本作は最初、「病める

精神」と題して、冒頭以下の五節が大正六年六月の雑誌「黒潮」に發表された。次いでその續

編にあたるもののが、「田園の憂鬱」と題して同

七年九月の雑誌中外に發表されたのであるが、その後、同年十二月に出版された短篇集

が、その後、同様の病める憂鬱の中に、前記の「病める憂鬱」の

改作されたものと「田園の憂鬱」として發表さ

れたものを合して、「病める憂鬱」は田園の憂鬱なる題下に收められ、更にその全部に

互つて改訂補されたものが、大正八年六月單行本「田園の憂鬱」として新潮社から刊行され、定本となつてゐる。現代日本文學全集第二十九號所収。

【梗概】都會の重壓と喧嘩に苦しんだ彼は、其處から脱れて疲れた頭を休めるため、妻と處處を稱揚した。房がこれは、實は村太夫が結婚させられたといふ懸け引もある。又遊女を身請しようとした男が、毒薬心中を申出で、女が薬を飲むのを見て、その心を確めて身請けした話もある。かく單なる詐欺の手段の面白さばかりでなく、廣く社會の諸方面に亘つてゐるのは、かゝる類の書としては罕

て身請けした話もある。かく單なる詐欺の手段の面白さばかりでなく、廣く社會の諸方面に亘つてゐるのは、かゝる類の書としては罕

く取るべき所であらう。

天隱龍傳 (著者) 龍潭 を見よ。

【田園の憂鬱】 (著者) 佐藤左夫 小説 【作者】佐藤左夫 [成立] 刊行 本作は最初、「病める

精神」と題して、冒頭以下の五節が大正六年六月の雑誌「黒潮」に發表された。次いでその續

編にあたるもののが、「田園の憂鬱」と題して同

於ても相模次郎の野暮茶を當世の流行として、おさんとの對話を、猪早太に持つて行く程の詩體を世から持り出してゐる。當局へ向

けた諷刺が人氣を呼んで、大售りを取り、三

月頃まで市中で賣り歩いたと言はれてゐる。吉原の嫖客も遊

物がはやり、風流が出てゐる。人の命は百五十

歳と云ひ、定信は菅原の筋筋である故に、悔

かに幻縫や幻鏡を屢々経験するやうになつて

てつた。いろいの幻縫に怯えながら、彼

見てゐることがあるかと思ふと、何でもない

ことだがひどく氣になつた。邊には安らかな

眠りの得られない夜が續くに伴れ、思ひもか

けない幻縫や幻鏡を屢々経験するやうになつて

てつた。いろいの幻縫に怯えながら、彼

見てゐることがあるかと思ふと、何でもない

ことだがひどく氣になつた。邊には安らかな

眠りの得られない夜が續くに伴れ、思ひもか

けない幻縫や幻鏡を屢々経験するやうになつて

てつた。いろいの幻縫に怯えながら、彼

見てゐることがあるかと思ふと、何でもない

ことだがひどく氣になつた。邊には安らかな

眠りの得られない夜が續くに伴れ、思ひもか

けない幻縫や幻鏡を屢々経験するやうになつて

てつた。いろいの幻縫に怯えながら、彼

見てゐることがあるかと思ふと、何でもない

ことだがひどく氣になつた。邊には安らかな

【題材】官政の改革と、その前後の社會の重大事件。【日本】黄表紙百種(朝日國文庫)、貴表紙(近代日本文學大系)、寶表紙作集(蘇武編・近代日本文學大系)、佐藤左夫(成田・角田)、本作は最初、「病める精神」と題して、冒頭以下の五節が大正六年六月の雑誌「黒潮」に發表された。次いでその續



編にあたるもののが、「田園の憂鬱」と題して同

七年九月の雑誌中外に發表されたのであるが、その後、同年十二月に出版された短篇集が、その後、同様の病める憂鬱の中に、前記の「病める憂鬱」の

改作されたものと「田園の憂鬱」として發表されたものを合して、「病める憂鬱」は田園の憂鬱なる題下に收められ、更にその全部に互つて改訂補されたものが、大正八年六月單行本「田園の憂鬱」として新潮社から刊行され、定本となつてゐる。現代日本文學全集第二十九號所収。

【評評】本篇は作者の出世作であり、文壇的地位を確保したもので、筋と稱する程のものは多少の追々しさはあるが、しかも矜持のある

改作されたものと「田園の憂鬱」として發表された長篇で、やはり田園の憂鬱と同一の文章で、主として周囲の景物、自然の事象等が主人公の心に反映したその他の姿、官能的な筆致を駆使して描出し、其處に、豊質的な

妄想に悩む不安な心の姿を、巧みに彷彿させた。即ち自然と主人公自身の心持との交感を描いたもので、物の背後に潜む幽冥の消息を嗅き出し、其處に豈かな空想の裏をひろげ、以て第六感の世界を暗示し、憂鬱の微妙な感所に觸れようとしてゐるあたり、詩人の

改作されたものと「田園の憂鬱」として發表された長篇で、やはり田園の憂鬱と同一の人物を主人公とし、彼がその後、東京に出て

来てから無為な生活困難した心持等を描いた作である。大體の傾向は、「田園の憂鬱」

と同様なものであるが、かれが自然を対象と

してゐるのに對して、これは人間を對象とし

てゐる。即ち主人公尾澤翠雄と女優になつてゐるその妻吉子(通称川翠子)、弓子の母親、

文學老年の江森清山等との交渉等によつて、

筋の上に多少の動きを含んでゐる。ほん文章に就いて見るも、後の作であるだけに、餘程

なだらかに繰られてゐる。概して藝術的香氣に於ては「田園の憂鬱」に及ばない代り、通俗

的興味に於て勝るものがある。

田園文學 (著者) 田園の事相

風光を描出した文庫であつて、著者は中世紀の騎士と牧者、或は牧人と牧女との戀愛語、所謂バストラル(Pastoral)と呼ばれるものか、近代の田園物語、例へばフランスのジュオルジ・サンド女史の幾多の物語の如き、或は英國のトマス・アディのウェッセ克斯を舞臺とした多數の物語の如きに至るまで、廣く田園事相を描破し、且つ物語る文藝を指すものである。【著本】改題本は明和十年刊行の「世間用心記」がある。同書は、名著文庫二十

天下一面鏡梅鉢

(著者) 唐表紙 三冊合一冊 十四丁十七箇 (著者) 唐表紙 三冊和「春工」榮益社長喜「刊行」宣統元年

規制の大小や田樂者等によつて、芝田樂・大田樂・小田樂・神子田樂・徒田樂・村田樂などと區別された。芝田樂は「平家物語」の頃立の條に初めて見える語で、芝生の上で行ふ意。大田樂は大がかりの意。源河天皇の永長元年七月十二・十三の兩日、京都で盛大に行はれた。一般の老幼道俗だけでなく、納言・參議の月朝雲客遊が異裝を假らして歌舞の群に加はり、非遙を抽引すべき檢非違使が禁衣を着して共に跳り狂つた(源田樂記・古事記・百韻抄)。小田樂は小規模のもの。諸社寺の神事用。神子田樂は巫女の行つたもの。「吾妻鏡」や「蹴訪大明神拾詞」や「高倉院般馬行幸記」等に見えてゐる。徒田樂は歩田樂とも書く。騎馬田樂に対する稱。普通はこれ。村田樂は村間で行ふ行裝の華美でないもの。【波瀬】春日神社の神官千鳥家の久安六年の文書に「白川田樂・新座田樂」とあれば、平安朝の末には、本座・新座と分れ、京の白川のが本座であつたことが知られる。また宇治にも田樂があつた。すでに專業者であつて、本座・新座各々十三人で、頭は圓めてゐたが、妻帶者であつた。【服裝】平安朝の初期には、恐らくまだ固定してゐなかつたであらう。永長の大田樂には、假裝も種々様々で、「其裝束處」等甚だ複雑、如レ形如レ隊、以ニ鶴唐ニ爲レ衣、以ニ金銀ニ爲レ飾、富者傾レ産、貧者賤而及レ之」とあるので、その華麗なことは想像される。降つて專業者の出来てから後の鎌倉時代に入つても、この華麗拘縛の持続したことは、「太平記」の北條高時の大田樂に耽る所の記載や、貞和五年の四條河原の勘定田樂の叙述の上にも知られる。但し能の演出には、必ずしも華麗のみを求めず、實質に立脚したであらうが、これに関する記載はない。

さうして神事に用ひられた田樂の服飾のみが書留められてゐる。嘉慶元年の「春日臨時祭記」に「就中於田樂猿樂之裝束二者、側以櫻絹被頭ニ隨ニ面々之意行、令用意之間、色々行様、毎人花頭外見之所及置重之結帶也」とあるから、室町の初世もやはり人日の時頭に努めたといふべきである。降つて永正十七年の「春日若宮祭設田樂頭屋日記」を見れば、いつしか服裝が定まつて、頭屋から田樂法師連へ下附されてゐる。要を抜んでいふと、笛吹は金柶の狩衣に唐錦の指貫、他は平裝束で、袴般子の水平に大文の指貫、これ等の附屬品並びに練脇笠用具等で、かなりな費用であつた。江戸時代に入つて、日光東照宮の三十三回忌・五十四回忌・百回忌・百五十回忌・二百回忌・二百五十九回忌には、特に田樂を加へて、春日社奉仕の田樂六人をして勤めしめたが、その時の記録には、

一狩衣金柶	六人前	一石帶	同断
一指貫腰子	同	一末廣	同断
一練脇笠	同	一立鳥朝子	三
一高足	二本	一刀玉	二
一小鼓	一	一太鼓	二
一綱木	四	一床几	六
一杏	六	一白踏皮	六

とある。これで凡そ推測し得る。立鳥朝子は開口や立合の舞に用ひたもの。笛吹の分以外は水干とあるべきで、今も奈良では水干と呼んでゐる。「曲目」永長の大田樂には、舞樂の「陵王」や「抜頭」も舞つたが、本行としては「足・高足・刀玉」の如き曲技と龍馬とを組ぐべきである。又演技の地點よりしては、中門口といふ稱呼があり、配貢の意を語るのに開口があり、笑を説くものに「もどき」があり、舞に

は立合(たまわ)といふがある。一足は一本足の意で、棒に附けた横貫に左右の足をおき、棒の上部を両手で握つて歩くこと。高足は今の竹馬の如きもので、北野神社藏の祭禮疏卷に、この一足と高足とを明瞭に描き分けてある。寶暦年中、田樂法師から江戸幕府へ書上げたものには、一足のことを高足として、一足のことは少しも記してない。今も區別してゐない。又天野爲景の「禪尻」には「洛陽田樂記」を引いて「高足木闌有長脚、一足一具也……」とある。これによれば、田樂の笛を吹く者は高く大きな花笠を被いて、背から黒漆の高足駄をはくが、あれが高足といふことになりさうである。刀・玉は短刀三本と扇一本を空へ投げ上げて曲取をすることとて、神事田樂では塵拂を拂ふものとされてゐた。能齒は能といふに同じい。昔今の事蹟を樂器入り、歌唱交へで、仕方話をすることが田樂能也想)。中門口は廊下に參上した時、中門より參入の時に奏する曲の意で、奈良では笛も吹けば鼓も打ち、刀玉や高足をも演じた。開口は能樂でいふと同じく、演技の最初に述べる観の辭。奈良のを例に示す。

太夫フシ「ものみざりけり——又悦をかさねはへともにめでたき。ものみざりけり。ありうどうどら。

ワキコトバ 神明の體外に即し。樂樂を奏して萬民懶閑の日を累ねる佛法の聲。内に和らかなり羅化をとなへて。天下安寧の時に應ふ増勝れ。増勝なる宮寺かな。」

もどきは比擬の意で、延年の開口猿樂に當るものである。これも奈良ので例を示す。

太夫コトバ 水無月の羅刹の歌ひする時は。羅刹鬼立て。は羅刹鬼と評定したり。

カケアヒワキ水無月は題に通すたるはいかに。

太夫任閒なく請つて聞かせ申す。正月はむつきと祝ひ。二月きさらぎ。三月誕生。四月卯月。五月さつき。六月水無月と申し。日島度事は御寺の繁昌。願しき事は今きたらぬ風の前の願。億万世界へは・とあり。何か願しき事の候。

ワキさあらは立合をもつて舞ひ詠めうするにて候。

大夫 一段目出度候。

立合は相撲。太夫とワキですることもあり。もつと多人數が本座・新座の樂屋から出て、競技的にも行つた。これには地謡もあつた。同じく奈良ので例を示す。

太夫ワキ ものさありしや。准 太公望が聞をおろし。釣をたれ。釣つたるは何や。釣りたるものは干鯛と鰐鰹と三つの山駆き。釣をいかにけふがり。あめたり(本ノマ)・けふがり頬を見たれば。かの春のやしや。たるれゆく。四方の山べに開立ち。申すをまに——聲きけほ御園は春の朝。下海には萬劫難往む。蓮院方丈滋州の。三つの山ほど祝ひけり。邊になれたる其の聲の餘を聞るなり。聞るなり。

【勧通田樂】 諸人に勧めて浮財を寄通せしめるための田樂詔行をいふ。何時始まつたか明かでない。貞和二年の二月、比叡山の講堂で勧通田樂が行はれてゐるから、これより前に京都や奈良で行はれたことを考ふべきである。最も著名なのは、貞和五年六月十一日に、祇園の執行行惠が四條の橋を架ける料を得るために、四條河原で催した勧通田樂である。事は「太平記」に詳かであるが、本座・新座の田樂を合はせ、老若を分けて能歌べをさせたので、前景氣も湧いて圓白・大臣・將軍以下が桂敷に上つて見物した。東西の假屋から兩橋掛りを経て御臺に入り、一の廊・龜拍子・刀玉から立合が了つて、次の能に移つた時、上下二百四十九間の桂敷が持甚倒しになつて、柳井宮を初め死傷者が甚だ多かつた。この勧通田樂の額

場料を取るものは、猿樂でも曲舞でも平曲でも田樂でも、皆勘通といつたのである。室町の中世からは田樂は次第に衰へて、勘通のことも減じ、江戸時代に入つては絶えて行はれなくなつた。

【田樂の番組】勘通田樂には、惜しいことに演技目が傳はつてゐない。貴族の邸内で行はれたものにも書簡がなく、文安三年三月、伏見宮貞常親王が奈良の住心院に成らせられた時のが最も古く且つ詳しい。院主大僧正實憲の書いた「文安田樂龍記」から抄出して示す。

次田樂 先中門口

ビンザサラ 菊阿彌。笛玉阿彌碧花笠。高足駒ヲハケ

次立邊

飯阿 愛阿 龍阿 全阿也。掲萬歳聲

飄々袖事良久。

次刀玉

玉阿今阿兩人勘之。其技者之頭は一人也

次能藝 十番 (田樂鏡參照)

以上で日没になつてしまつた。こゝに、「近來新座無日本座零落す。今又本座古に歸して興座舉。福若丸能藝皆解説尋常たり……」とある。福若丸は本座の一人で、一座の出演者はすべてで十八人、細分すればビンザサラ・小鼓・太鼓各一人、笛は三人。又能役者は六人、狂言方は三人なのである。この翌日、將軍義尚の弟義親(後御親)が田樂見物のために訪れたが、中門口以下は前日の如くで、能藝だけは違つてゐた(「田樂鏡」参照)。曲技はいつも右の順。能藝は最後に出すのが慣例で、開口やもどき等の加はる時にも同様であつた。即ち春日の裝束^{かみ}の時の順を示せば、次の如くである。

ひ物もなく、手も笛に合はせて舞ふ。曲目は、
社祭に行ふ。刀玉・高足等の曲技はなく、又講
の二十一に分れてゐるが、見た處では一連の
舞である。この外にシテテンの舞がある。シ
テテンはシテティの號で、雅樂の鼓の譜であ
るが、轉じて鼓の意に用ひる。こゝでは立鳥
帽子をつけた小人が二人居つて、一のシテテ
ン二のシテテンと呼び、一は舞の始まる前に
舞臺を三重して終りに鼓を一つ打ち、二は舞
の終つた後に立つて舞ふ。龍馬は昔からな
つたと傳へてゐる。前記の舞は桐木四人、鈴
巴を描いてある太鼓を腰につけた者四人が、
笛に合はせて舞ふのであつて、他の樂器は使
用しない。服裝は綾闌笠、綾襷子の直垂に、
袴は褐色で白の二つ引兩の指貫。

【王子田樂】王子權現は熊野から勧請したの
であるから、田樂も共に移したものかと思ふ
が、文獻上徵すべきものがない。明治維新前
は七月十三日の祭に行つた。今は八月十三日
の祭に、神社の舞殿で演ずる。樂人の使用す
る樂器は、笛と大太鼓。舞手は桐木と太鼓と
小鼓、出仕行列は次の順。

權現 左右 左右 笛

權相 發面 武音 太鼓

子慶勝 田樂 田樂 田樂 左右

(一) 樂 田



(道送) 樂田智那



(シテテシの一) 樂田智那



(子拍二) 樂田智那



浦島神社樂所傳詞所



器樂の樂田智那



國之樂田子王



國之樂田子王

田樂はすべて直垂形の服に桔梗、紅白の下げ紙をしてある方形の花笠を冠り、内国人は細木、二人は太鼓を持ち、子麗勝も服装は同一で、同じく紅白の下げ紙をして立扇形子形の花笠を被り小鼓を持つ。曲目は次の如くで都智と異なるが、その實は共通のものが多い。

中門口 舞行(舞き) 行進(行)

賀樓(同) 中要(同) 三拍子(同) 武者(用)

鼓(用) 鼓三度 中立(禮儀) 携帶(同) 花旗

子麗勝 子麗勝 子麗勝

武者二人は後姿に違ひないが、甲冑をつけて大太刀を左に四握、右に三握を帶び、雁刀を携へてゐ、八人の舞手も舞術するのがめづらしい。

【風來寺田樂】三河国南設楽郡風來寺の樂師

堂に於て、舊正月の三日と十四日に當る日に演ずる。起源は不明であるが、文明以前から

行はれ、正月の御田(田建ともいふ、新年春)と文雅してゐて、兩者の區別を附け難い。樂器

は笛・太鼓・鉦・銅鏡子・韁木で、他に見られない舞があり、歌があるのを特徴とする。シテ

テンに當るものに、神天子があつて、天冠を戴き、絆の振袖に紫の持、東西より一人づつ

鼓を持つて出て舞ふ。外に、一二の舞・總田樂等があつて、これには無智や王子の舞の手を見出す。歌はすべて御田用らしい。

【日吉田樂】古くから行はれたが、諸侯なものであつたか、日吉社記にも田樂法簡著立

法简(音楽事典著立)春日大宮若宮御田樂圖事

(二) 樂 田



大日春日御宮若祭禮



樂能の大成された時には、田樂の能に衰退の色は著しかつたのである。室町時代の中葉文安の頃は、本座は益々衰へ、新座だけはやゝ盛勢を維持してゐたらしいが、それも永續せず、樂能の盛衰を傍観してゐたに過ぎず、その香組さへろくへ傳はつてゐない。

【田樂の香組】文安三年三月十七日に、伏見宮自常親王は奈良の住心院に成らせられ、院では舞樂の後、田樂を御観に入れた。當例の中門口・立合・刀玉がすんで〔田樂參觀〕、最後に能藝に入つて、次の十番を演じた。

「春日田の春日門の能」(揚貴紀)、二番女添の能(文安式)、「三番北野春日能」(北野春日)、四番女添の能(北野春日)、「五番女添の能」(鳥羽舟)、「六番者

の能」(鶴見大河)、「七番女添の能」(上人達)、「八番小野小町の能」(卒那裏小町)、「九番春風の能」(不囁)、「十番賀方の能」(賀方賀方詠歌)。

これは本座の演技で、當年十七歳の蘿若丸が中心に立つたのであるが、詞章や舞風に關しては、更に傳はつてゐない。田樂能のよいものは凡そ皆樂能に取入れられたものと假定し、題名の上より判じ得る相當曲を示せば、前掲の括弧内に示した如くである。親王御成の型十八日、將軍御向の弟御親王(母御親王)が田樂見物のために住心院を訪れた。この日の能藝は八番であつた。

「一番水添の能」(捨道)、「二番御親の能」(收穫)、「三番

住心院の住持」、大和正宣の記によれば、見物は前日に超過して、能が終つて後、會所に於て舞や音曲があり、裝束を着けたまゝで廣庇

の體(不明)

で阿波をひかはして能の形をなし、すなはち仕舞をもなし、狂言も兩三番演ぜられたのであつた。右八番の詞章は同じく傳はつてゐない。相當曲を講曲の中から物色して、同じく括弧の中に示した。當時は樂能と田樂とはほぼ同一の曲を演じたものと思ふ。住心院能出動者は次の如くである。

福若丸 菊子丸愛弓子 龍喜久丸愛弓子

藤松丸也弓子 菊阿比古サマ 優阿イ、タテ

似阿小枝 愛阿無事組等場三郎事 稲若丸助也

林阿太鼓 龍阿助之人數 玉阿刀玉笛

今阿刀玉 一阿莊音 宮阿笛

德阿莊音

【裝束能の能】文安以後田樂は益々衰へた。而して曲名も香組の上には見出しが難い。

春日若祭院の裝束賀能だけは缺けてゐるが、春日若祭院の裝束賀能だけは缺けてゐる。

これは本座の演技で、當年十七歳の蘿若丸が

中心に立つたのであるが、詞章や舞風に關しては、更に傳はつてゐない。田樂能のよいものは凡そ皆樂能に取入れられたものと假定し、題名の上より判じ得る相當曲を示せば、前掲の括弧内に示した如くである。親王御成

の型十八日、將軍御向の弟御親王(母御親王)が田樂見物のために住心院を訪れた。この日の能藝は八番であつた。

「一番水添の能」(捨道)、「二番御親の能」(收穫)、「三番

住心院の住持」、大和正宣の記によれば、見

物は前日に超過して、能が終つて後、會所に於

て舞や音曲があり、裝束を着けたまゝで廣庇

の體(不明)

で阿波をひかはして能の形をなし、すなはち

仕舞をもなし、狂言も兩三番演ぜられたので

あつた。右八番の詞章は同じく傳はつてゐない。相當曲を講曲の中から物色して、同じく括弧の中に示した。當時は樂能と田樂とはほぼ同一の曲を演じたものと思ふ。住心院能出動者は次の如くである。

福若丸

菊子丸愛弓子

龍喜久丸愛弓子

藤松丸也弓子

菊阿比古サマ

優阿イ、タテ

似阿小枝

愛阿無事組等場三郎事

稻若丸助也

林阿太鼓

龍阿助之人數

玉阿刀玉笛

今阿刀玉

一阿莊音

宮阿笛

德阿莊音

同和園、三味鶴竹澤伊三郎

【装束能】東御三郎右衛門、安達助助(御前助)、中村助助(御前助)、知島之頭、早瀬左兵之頭、相馬右衛門(中山家助)、

鷹利助、中右衛門(尾上新七)、元右衛門、大江人達(大江新七)、金村助助(金村助)、伊織(三枝佐助)、お才、

お殿(萬葉の孫)、猪の井(藤川山吉)、お刀三郎

次郎(源次郎)、風吉松(風吉松)、櫻藏(三枝大五郎)等。

【装束能】書印豪根の外に、歌舞伎脚本傑作集第

九卷所収。

【装束能】天下茶屋の敵討を坂本陣

に書き込む。但し憚つて、名稱は近江源氏になつてゐる。

【装束能】(序幕) 城外出陣 坂本城の和田常

が、春日若祭院の裝束賀能だけは缺けてゐる。

翌年には、

ごはりしのぶ合浦等を演じた。翌日即ち年々十一月廿六日には、

多く變更して、箱崎・雪鬼・經政・ふる・ほり。

かしは合浦といふが如くにしたが、必ずしも正確に演出されず、半能にしたこともあれば、全然省略したこともある。演出曲は總計十三日には、船六番、狂言三番を演じたのが古例で、立合や開口の様に、薪水・松巴・經政・ふるが、春日若祭院の裝束賀能だけは缺けてゐる。

となく行はれた。當日即ち年々十一月廿六

日には、船六番、狂言三番を演じたのが古例

で、立合や開口の様に、薪水・松巴・經政・ふる

が、春日若祭院の裝束賀能だけは缺けてゐる。

となく行はれた。當日即ち年々十一月廿六

日には、船六番、狂言三番を演じたのが古例

で、立合や開口の様

とあるが、恐らく本作と同一物であらう。【諸本】竹本筑後據正本八行六十三丁本、山本九兵衛板。諸種の近松全集に收む。【題材】題名の示す如く、筋曲の「天鼓」から構想したものであるが、第五段を除いては全然別趣向のお家騒動物で、狂言の「こんくわい」(朝頃)、元禄十年霜月京都早雲座上演の「關東小六今様姿」

處へ時景親子が、親王の仰せと稱して、天鼓を渡せと迫る時、總若・才若斬け來つて追廻す。

聞き覺えの曲が洩れて來るので、憤しくて忍び込み、腰元達に手水鉢と間違へられる可笑味がある。やがて中將と知れるが、陸奥は素知らぬ顔で請じ入れる。それとも知らず中將は主の所望に任せ、昔陸奥といふ禁中第一の美人と契り勤勤となつた顛末、その後の浮湯との懸の無縫等長々と漫談をする。そこへ

の龍の御殿で七夕祭をしてゐる所へ、時景親子が參殿して、澤潟は夕映を宮仕に出せと遺言して自害したと偽り言上して、天鼓を掛けた。親王これを御手に取つて打つて見るが少しも鳴らない。そこで管絃講を催して澤潟の靈を弔ふと、蘆澤の池の面にぼうつと澤潟が姿を現し、天鼓を奏すれば、忽ち妙なる音色生

眞似て、女を誘ひ出して契る(『關東小六今櫻姿』)一番目の住吉社頭で小六が高根の前と契る場面を借用)。女は時景の娘夕映であつたが、夕映は豫々(おもむき)兩親等の奸策を起しんでゐた際なので、小六

澤潟が中將の跡を慕つて來て門前に落ちてゐた見覺えの扇により、それと知つて案内を請へば、中將は奥に離れる。澤潟は陸奥と押問答の末腰元達に突き出される。この隙に陸奥

じて人々騒に入る(略曲「天敵」をその脚流用)。澤湯の靈は、舞ひ奏しながら時景親子に近づくや、忽ち狐面の大男となり、己は伊賀の彌左衛門狐と名告り、時景親子の罪惡を發き、我

109

三位富士丸の家来徳若・才若が奏する萬歳樂に、蟻の親王は御感の餘り、祕曲の來由をお尋ねになる。時景が富士丸の家の賣天鼓の由來や富士丸の遺兒澤潟の摺織の噂を申上げると、親王は見ぬ懸に憚れて、澤潟に天鼓を持つて官仕せよと仰せあれば、徳若・才若是喜んで、「萬歳」を奏して退出する。(中)時景夫婦は娘めのこを澤潟と詐つて參殿させたいが、獻上すべき天鼓の無いのに窮して、めのこ宇治太郎に相談する。折から澤潟の情人吳服スルブの中將雪枝の家人巴丸が、鳥追の姿となつて、澤潟を連出す所を宇治太郎が見つける。時景は事情を巴丸に打明ければ、巴丸は天罰に代る鼓を持へるべき狐を釣る事を約束する。(切)巴丸と澤潟が野邊に出て、狐を釣らうと恃構ますこうへてみると、狐が美しい若侍になり、又巴丸の叔父なる僧に化けて来て、殺生を恵ひ止まれと意見しきこゝに、僧が民の鼠の油揚に釣られる所相な料などあつて、狂言「こんくわい」(をその體氣用)、最後に道士と妻を現じ、私は天鼓となつた狐の夫、能勢の相荷の千年狐と名告り、時景夫婦等が天鼓を奪はうとしてゐる事を告げて去る。其

男に裝束させて邸外に逃れ出る。(切)丹波國能勢の稻荷は澤湯が信心の社なので、宮司松垣藏人が時景と内通してゐるとも知らず、顛つて來てゐる。そこへ夕映が小六を伴つて尋ねて來る。松垣の妻は天鼓の妻風に憑かれた眞似をして、天鼓を渡せと狂ひ出し、社人・神風等がこれに和するが、折から駆け付けた山路の判官が彼等の化の皮を剥いで、澤湯等を逃がす。(三段)序 舊て陸奥の内侍と通じた科により、勅勘の身の呉服の中將は、巴丸の兄阿呆の金目丸を伴ひ、澤湯の行方を尋ねて、富士丸の墓所壇の大寺に到り、宣旨に背いた罪により、富士丸の墓は發かれた事を聞き、我が罪の恐しさに、澤湯を官仕させようと策を金目丸に授ける。澤湯は松垣の罪を逃れて機、この寺に忍んでゐたが、聞らずも金目丸に田舎ひ、金目丸から中將は腹を切つたと聞き、馳しみの極自害しようとする。金目丸は當惑の餘りつい實を告ぐれば、澤湯は中將が陸奥との關係の復活からかく謀つたものと推し、狂亂となつて駆け出す。(切)夜に粉れ櫻を抜け出た中將は、とある柴折戸の内に

は中將を逃さうとすると、中將も初めて陸奥と氣付き、抱き付くのを制して勅勸を許され世に出るやう別れの盃をする。と澤湯の一念焰となつて盃中に入り、陸奥の顔色變じ、澤湯に代つて中將に恨を首ふ。所へ宇治太郎がこの家が怪しいと踏込むが、正氣に返つた陸奥の氣轉で、中將は天井から逃れる。陸奥は折から駈け付けた金目丸と共に惡人共を散々暴弄した末、澤湯も力を合せて追ひ散らす（この段は「風城傳の原」一番目或る大名の下廻敷の場を殆どその體の再用である）。「四段」（序、澤湯姫道行）澤湯は中將の行方を慕つて、大寺をさ迷ひ出る。（中）澤湯・中將の行方を尋ねる德若・才若是、木津の渡で伊智國上野の彌介狐が化けた童子と同船し、その口から、天鼓が堺の大寺に棄て置かれてある事、彼がこれから丹州四松殿の仰せで、親御左衛門狐の名代として天鼓の守護に行く事等を耳にする。（切）時量親子は堺の大寺に澤湯が隠れてゐるといふ風聞があるので、品薄脇百人を語らつて押寄せ、宿坊達の防ぐのを打破つて臥藏に押入る。彌介狐は必死と奮闘するが、遂に斬殺されて天鼓を奪はれる。「五段」（大切）聲の親王が三笠山

が子の敵と親子の首を引抜く。親王はこれを見て深くその不明を詫び、澤潟一家本領安堵と宣言あれば、澤潟・陸奥・夕映・中將・小六・巴丸・金目丸・總若・才若等諸國の狐に伴はれて忽ち一所に會し、行列を揃へて京に向ふ。

【構想】梗概中に指摘した如く、各方面から構想を探り入れてゐるが、特に歌舞伎の分子の多い作である。恐らく作中の人物にそれ／＼當時の名優の面影を配した事であらう。併し餘り多くの想を盛り過ぎた結果、事件の展開上不必要と見られる人物も現れ、全體として不統一の嫌ひがある。

〔高野(正)〕

【参考】近松全集第六卷解題節井乙男

天才てんさい 小説【作者】小栗風葉【發表】明治四十年四月、萬朝報所載(未定)。【刊行】同四十一年三月、隆文館

【梗概】同じ下宿に起臥してゐる間宮貞一・原健太郎の二人を中心として事件が展開する。天才の名が早くから高かつた、若い文学者の兄を喪つた健太郎は、兄と同じく肺を病みながら、兄の志を繼いで、英學上の新學說を建設しようと苦心する。病氣と焦躁と、それに自我中心で、誇りが高い彼の性格でもあり、

生活に悩む一族の生活を知りながら冷淡を極める。一方、眞一もまた作家にならうとして、自信が高く、人を信じない。愛人菊野と叔父との關係を疑つて、處女作の筆が鈍る。その中、慶州の紹介で沙翁劇の翻譯に着手するところで終つてゐる。

【批評】當時に於けるこの作家は、所謂戸塚の昭和時代であり、傾向も自然主義マンネリズムから少しも脱出し得なかつた。この作物も「青春」(廻環)以後の努力の作として、發表當時注目されたに拘はらず、その世紀末的な雰囲氣や、懷疑に悩まされる人間性格は、「青春」以上に、何ものよりも加へるところがなく、殊に同じやうな陰慳な主人公を並べながら、それを個性的に活現する描寫の精緻もない。それにこの作家の描く文學者生活は、いつも齒の浮くやうな皮相難が多かつたりして、作家自身がこの作物を持ちあぐんだのも、出來榮えの手際からは尤もと肯定される。　〔千葉〕

天才主義 (てんさい)
【解説】理想的な社會文化の實現には、その時代、その社會の天才者の指揮教導に待つべきであると主張する主義である。多數の民衆は知識的にも道德的にも、見て精神的教養の醸和に於て低劣卑鄙である。これを導くものは少數天才者でなければならぬ。従つて天才主義は平等を主張せず、飽くまで差別を認め、特權を許し、現實以上の理想世界を實現せんことを念願とする。ギリシャの社會に於ては、或る意味で天才主義が實現されてゐた。爾來、理想主義といはれるものは、必ず天才主義を基礎として存立が認められてゐたと見てよい。十九世紀最初の理想主義は、大抵天才主義(又は英雄主

の主張であつた。アーヒテの自我哲學は、自我といふ貴値的天才の活動を主張したもので、道徳的天才の活動が眞の文化の向上と考へられた。シュレーゲルの浪漫主義は、藝術的天才の活動そのもので、この天才のみがよく民衆を藝術化することが出来るといはれたのである。カーライルの英雄主義も亦、少數天才の力が社會の進歩を來すといふ點に重點を置いてゐた。ニーチェの超人主義は、取りもなほさず天才主義である。

〔宮島〕

填詞 しん 填詩 「意義」 形態は詩の長短句の如く、句に一定の平仄を有する事、近體の詩の如き一種の詩をいふ。各題ごとに法式を異にし、各句ごとに平仄は必ず一定してゐる(因に言ふ。長短句とは三字・五字調は六字を標準した形態の歌で、常法に拘はらぬものである)。「名稱」 各題ごとにその法式に則り、平仄排列の法を考へ、句毎に文字を填充して一篇をなすによつて填詞と稱す。また古樂府の衰微に伴つて新に起つた歌詞で、樂府(別項)の末流であるから、詞餘とも單に詞ともいふ。何れにしても節奏を有し、聽はれるものである。されば漁歌子といひ憶江南と稱し巴謡辭といふも皆その節奏を示すものである。「沿革」 詞餘の滥觴は、唐時代に在る。李白の「憶秦娥」と「菩薩蠻」とは、常にその根源に擱せられてゐる。併し「菩薩蠻」や「憶秦娥」は形態も編法もやゝ複雑で、原始的の詞餘と考へられない。併しその外にも、李白には「桂殿秋」「連理枝」等詞餘の作に乏しくない。白居易・溫庭筠等が、相次いでその作に執心した爲め、唐から五代に亘つて李後主を初め、劉禹錫・皇甫松・韋莊・牛峤・毛文錫・孫光憲・歐陽炯・馮延巳等が輩出した。更に宋代に入つては北宋時代に發達し、

南宋には發展の極に達した。即ち南宋百四十
年餘りは詞餘全盛時代である。元代に至ると
所謂元曲、即ち劇が隆興して從來の詞餘は昔
韻や格調を異にし、劇中の曲即ち歌として採
用せられた。それと共に詞餘は衰頽したので
ある。

【我が國に於ける詞餘】「御園集」卷十四に見
る嵯峨帝の漁歌五首及びこれに和した有智子
内親王の二首、源野貞主の五首、藤原三成の一
首を最も古とする。漁歌は漁歌子の事で一名
を漁父ともいふ。張志和の作にかゝるもので
ある。嵯峨帝にかかる聖作の存する事は、亦以
て當時の漢詩界の活氣を察するに足る。田能
村竹田の「填詞圖譜」下の填詞圖譜國字總論の
條に、我が朝には前中書王兼明親王が、憶江南
の體に倣つて憶錦山の詞を作られたものがそ
の證據であると稱したのは誤つてゐる。嵯峨
帝などに次いで兼明親王の作はあるが、その
後は江戸時代に至つて、田能村竹田の如き、熱
心に試作し又獎勵もしたが、絶句の如く流行
するに至らなかつた。【利類】草堂詞餘には、
次の如く分類してゐる。小令(一語五十八字以内
のもの)、中調(一語五十九字より九十字迄のもの)、
長調(一語九十一字以上のもの)、又前半と後半と
平仄の相同じいものを雙調といふ。詞餘中最
も短いのは、次の竹枝(一名を巴浦節といふ。巴)
地名で誰は歌とも書き、巴の歌の音韻を意味する)、
芙蓉歌(竹枝)、一心連(女兒)、花心團子(竹枝)、
眼應聲(女兒)。竹枝とは、歌ふ者が竹の枝で拍
子を取る事を示し、女兒とは一群が囃子を唱
へる事を示してゐる。又最も長いのは營嘯序
の二百四十字である。以上によつて見れば、
我が國の詞餘は小令のみである。

（山）○清野（清田禪村竹田○晚翠軒詞譜○
同益齋詩稿○清野○清野同益齋集以成○
堺詞名解他先計○詞作高紅友○白香詞譜
○支那文學概論詞譜谷風○唐五代詞選（上
海新印書館）

點字「ん」「文字」を見よ。

田氏家集 〔ぞんし〕 詩集 三巻 【著者】
鳥田忠臣【名稱】鳥田忠臣は、自らを唐風に
呼んで田忠臣とも稱した。その家集の題。【成
立】未詳。但し寛平三年六月十三日の詩が見
えるから、その後のものなるべく、又その年
七・八月の頃に卒してゐる故、その間に成立し
たと考へる事も困難である。恐らく遺稿を弟
子等が整理したものであらう。【原本】類從本
（群書類從一三〇所收）の系統の外に異本の存
在を知らない。寫本としては、彰考館本・内閣
文庫本等がある。【内容】上巻七十首、中巻六
十二首、下巻八十九首、合せて二百二十一首を
載せてゐる。彼は少年の日から詩作をなし、
集の巻頭には承和十年、十六歳の作が載つて
ゐる。その他彼の師匠、その交友即ち菅原道
眞・源多・源能有・源勤・橋廣相・藤原敏行・安部
興行・紀夏井・大中臣眞主・清原有知・僧圓珍と
の詩の贈答があり、又藤原基經には三十餘年
の信任を得たことも見えてゐる。家集下・賦
雨中櫻花の詩に、東照宮年爲老樹の句の註に
「祇園東閣三十年強」（東閣は基經をいふ）とあ
るはそれを指してゐる。又兩兒や令弟に哭す
ものもあり、學者としての生活を知るべきも
のもある。【價值】平安初期、嵯峨帝を初め、
詩人が輩出して唐風の整正した詩が生れ、漢
魏若しくは晋の風は詩界を去つた。その後、
菅江二家と並んで都氏あり田氏あり、何れも
累代の儒者として詩人として、その家名を失

離しなかつた本集は「菅家文草」に比すれば鮮少であるが、その詩としての質に於ては、平安前期の盛唐・中唐の風を説いてゐる。自ら朝氣を含んでゐる。併し和歌の豪爽と共に、其の名前は散佚して傳來しない。されば三巻と雖も本集の存する事は、日本文学史上の重要と言はねばならぬ。(註解參照) [山岸]

【参考】菅家文草(ひのき)○本朝文粹(せんり)

點式(てんじく)併語(なごと)併語に評點を附ける法式の義(解説)點式の基本となるものは引墨と點印とであるが、點印は後に起つたもので、古法は引墨が基本であった。級級を附けるために引墨に丸を加へたり、また引墨以外嚴重の文字を書いたりした。即ち古法は長・短・平の三種で、このうち、平・長は引墨で、重は文字を書いたのである。平點は一線で一點であるが、長點は二線で、秀句に感じ一點では疊り多いといふ所から二點とした。

仕書きところぞうそくまく附けたのは嚴重であるといふ意味から、嚴重の文字を書いた一點半にした(通説英著^{著者}即ち句の傍に嚴重の文字を書いて、長點には及ばぬが平點よりは勝れてゐるといふしるしにしたのである。又長點の中最も秀でたものは、それに朱闇を加へて豪美し、三點とした(通説英著^{著者}印墨)併し長點を三點とし、平點の間に朱闇を附けて二點とした例もあつたのである。長點に關注する性中の説によると、餘り面白い句には、上から點をかけて句の下まで引下げてもかけ足らず、下にぐるぐるつて聲くのも體であるから、やがて筆を上へあげて、又一點をかけたのであると云ふ(通説英著^{著者})。然るに段々點を多くかけるやうになり、延いては

點印を設けて、それ等に點數の等級を定めて置いて押すやうになつたのである。

【沿革】引墨・點印は百門の安原貞室より始まるといふ説があるが、萬葉以前は一般に引墨であった。元來點式は和歌に始まつて、古はつまじるしと云つてゐた。即ち歌を見て、これは勝れてゐると思ふと、食指を伸べて爪形

を横に附けたのである。その上に再吟して、最も合點は百韻の中、二三十句に過ぎず、長點のものも亦二三句であつたが、談林に至つて

次第に點の句が多くなり、諸國に通文を廻し始めた爪形を加へた上に、また重ねてつまじるしをかけるのを長點と云つたのである(通説英著^{著者}所引『新水闘』)。併語もこれに倣つて

點式を定め、直門では點・長點・丸・嚴重の式があつて、主なる門人はこれに従つたのである。

而も合點は百韻の中、二三十句に過ぎず、長點のものも亦二三句であつたが、談林に至つて

評したりして門人を導くだけであつた。尤も探丸・抽許・式之の三吟歌に點をかけた一卷

が、依令の『巴蕉門古人部類』に出てゐるが、それは恐らく一時の興であつたのである。

【研究史】隋流の『詩歌學別題正』に、談林式の點式の亂歌となつたことを載いてゐる。芭蕉は點取を睡れた人であるから、やがて筆を上へあげて、又一點を

かけたのであると云ふ(通説英著^{著者})。然るに段々點を多くかけるやうになり、延いては

宗匠は多くの點印を作り、點取に俗衆の歡心を買つたのであるが、それでも最高の點印が十七點・十八點・二十點位のものであつて、京阪の如き高點の點印はなかつたのである。併

京阪では其角門の漢々が洛に歸るや、其角に最高點印にかくし點といふものがあつた。併

宗親に被はれる。〔一編〕(吉岡宗親) 宗親は、」の臣下木曾宣で、諸侯久吉を「ばさんとして、御綱し、折柄、天然に御通して御物した船頭傳兵衛は、一子大日丸に孫の妖術と浪切丸を譲り、妻方浪と共に自害する。(義手船の日) 妖術を曾得した傳兵衛は、萬に身を變じて立退く。〔二編〕(高砂御通) 月若の乳人五百機は、若君を尋ねてさまよふ所を天竺傳兵衛に斬られる。(四編) (高砂御通) 兵衛内) 五百機の亡靈は夫なる高砂の傳兵衛實は尼川十郎に月若丸を手渡す。十郎は妻おつなどの間の一子お沙を身替りに立て、役人桂源吾に渡す。天竺傳兵衛はそれを知つて十郎を訴へんとしたが、父作太夫の詔しで二人の傳兵衛は肉身をわたり、立ち別れだ。「大院」(高砂御通) 天竺傳兵衛の大日丸は、父の遺志を受けついで久吉を「ほさん」とし、先はし、且つ己の年月編ひし左京の切腹で大日丸の妖術も挫け、再會を約して別れる。

【解説】傳兵衛が五百機を殺す場、座頭が見聞はされて本水の池へ飛び込むや、瞬間に上使の姿となつて花道に現はれる早着りや、五百機の亡靈が門口の椅子を聞かずして内へ入り、また佛壇へ消える等の新工夫は悉く南北の發案で、観客の喝采を得、傳兵衛が厚司姿で外國の状況を物語る幕も珍しがられた。尾上家の蔵として今日に傳はつたが、再演以來、數度改訂せられ、三代尾上菊五郎の晩年に於て、宗體館と水中早着りの二幕が保存せられ、左京は名古屋山三、傳兵衛が上使の爲名は不破

ど役名も一定して現時に至つた。【通鑑】

傳習錄 ふみし 子書傳習錄 三編【著者】王陽明。陽明名は守仁、字は伯安。成化八年

書八編と稱めて、「傳習錄」下巻とし、前編を

〔通鑑〕二三の餘編に生れた。人となり豪邁不羈、任侠を以て自ら居つた。弘治十二年皇紀二二五九、道士に及第し、翌年初めて仕官した。

同十八年、侯臣劉健が谷大用を彈劾するに坐し、貴州の龍陽侯に貶謫せられ、赴任の途

上、獄の遣した刺客に追はれたが、縛にその翻を免れ、又屢々風雨の厄に遭つたが、辛うじて事なきを得た。これより失、彼は佛老に沈没したが、茲に至つて深く禪悟する所があつて、

進に知行合一の旨を發して、一家の學を朝鮮

に送る。時に正德改元の歲であつた。同五年、劉健等が倒れるに及んで、復び召されて慶陵

の知能となり、劉健等は益々過み、弟子は愈々多きを加へた。時に往々刃馬のことについた

けれども、當て一日も學を廢めなかつた。同年、正德二年、嘉靖二十八年、三十一年、三十一年、

劉健等が倒れるに及んで、復び召されて慶陵

を踰し、「傳習錄」と名づけて、復た慶陵の勅諭と名づけて刺し。傳洪はこれを覽

した。時に正德改元の歲であつた。同五年、劉健等が倒れるに及んで、復び召されて慶陵

を踰し、「傳習錄」と名づけて、復た慶陵の勅諭と名づけて刺し。傳洪はこれを覽

した。時に正德改元の歲であつた。同五年、劉健等が倒れるに及んで、復び召されて慶陵

を踰し、「傳習錄」と名づけて、復た慶陵の勅諭と名づけて刺し。傳洪はこれを覽

した。時に正德改元の歲であつた。同五年、劉健等が倒れるに及んで、復び召されて慶陵

を踰し、「傳習錄」と名づけて、復た慶陵の勅諭と名づけて刺し。傳洪はこれを覽

した。時に正徳改元の歲であつた。同五年、劉健等が倒れるに及んで、復び召されて慶陵

卷之三

三

が、溟香に、人生及び哲學に關する興味を起せた爲めもあり、一面、理想國の創立に負所がある。「天人論」公刊前、即ち明治三十一年七月に、溟香が「友誼報」紙上に理想國組の計畫を發表した。その第一に、公義心の作を必要として、「信實を以て私に處し、正を以て公に對し、至誠、之を躬行せんことをむ」と云ふ誓約がある。溟香は「天人論」について、道義・倫理の根據を哲學上一元的に説しようとしたものである。「内傳」「此書はの信仰及び主義を記す」と溟香は云ふ。次本著執筆の趣旨に及んで、人の知識は、本土一元論に歸向すべきであるとて、一元論の見にして二元論の非なることを述べ、有神と無神、物質と靈魂、哲學と神學、宗教と倫理等總て一主義の下に調和し得べしとし、「物心如なり。汎神論なり。萬有理數なり。生命萬體の向上主義なり。余は心的一元論を主張す」と述べた。本書は全篇六章から成り、第一章に於て物質性を論ずると共に、宇宙の本體と現實とに言及して物活説に及び、「物質の活けることは余自らの活けると同様なり」と云ひ、結局、内觀すれば、「宇宙は物質の海にして實は心靈の海たるなり。宇宙即ち心靈なり」と推定し、その新唯心論的立脚地を明かにした。第二章では、宇宙の本體を説明し、「宇宙は無窮無限なり。虛名に非ずして實體なり。實體は一體にしてまた心靈なり」と推定し、心靈は心靈を以て解すべきであるとした。即ち理に徹せる宇宙と理に徹せる吾人の心靈とは交渉密接で、人の道は須らく整然たる宇宙の道に則るべきだと断言した。更に第三章以下、生物學、精神學上から、「吾人は生命に於て不死。感化に於ても亦不死」といひ、人生が向

上主義によつて進化してやまぬことを説き、道徳の本源が宇宙道德の上に存することを略じ、宇宙的知識と宇宙的道德とに準據して、仁愛の意義を開拓し來るところに諸徳の根柢があることを明かにしてゐる。それから靈魂不滅説を唱へ、「死は靈に歸するなり。永久に活くるなり」とも云つた。著者は「是に於て思へ、吾人が自ら深く内に省みて、靈窓に接近し、之を修し之を開き、自觀に於て大自觀と交通し、大自觀の化力を受け、大自觀の氣呵に靈開し、而して遂に小自觀と大自觀との同化するに至るを求むること如何に倫理の極所なるかを」と力強く呼びかけ、「二十世紀の宗教は唯一なり。一の向上主義なり」と結論した。【批評】本書は哲學上の學說としては、別に斬新な箇所はない。むしろ醇化しきれない思想の塊りや細斷が多いが、ただ多年、新聞生活をした著者が二元論を排して、進化論上から心的一元論にまとめ上げ、全く彼一家の組み立によつて、現代の宗教・道徳・倫理の根據を明かにしようとした所に意義がある。又それだけ常識的でもある。文章が簡潔で旨意の明白なところは、かゝる著述としては珍らしいほどで、哲學・宗教趣味を一般に鼓吹するに大きな力があつた。實行者が素晴らしいいためであつたらう、當時類似の書が續々と現はれ、中には匿名博士の「破天人論」の如きものも出た。

昌休と共に、近江の油井伊能守正慶の日付
招かれて、千句を興行した時、連歌に關する
審を尋ねられ、都より参考書を取寄せて答
たものである。【内密】宗祇・宗長・吉田の
無類三吟百韻」を連歌の範とし、而八句及
返しの二句までの句體を説き、この十句中
附げざる詞、用ふべき詞、道具仕立様などに
いて詳記してある。奥に永祿四年十一月五
宗祇・昌休兩判の起訟文が添へてある。【解
典籍秦鏡】（しんきやう） 書目 八冊 【著
田口明良】〔名稱〕 初は「題字典籍標目」とす
積りであつたらしい。【成立】自序は、文化
年とあり、卷頭の宮田五溪の序は天保十二年
古香樓主人史雲の跋は、天保十四年とある
【諸本】寫本で傳はつてゐたが、それには士
本と八冊本とあり、近年になつて日本古典
集第四期に收めて刊行された。帝國圖書館
藏本を底本としてゐる。【解説】著者は尙
堂と稱する書肆の主人で、その職業上目識
た諸本について、解題を加へたのが本書で
ある。收錄された書籍は各方面にわたつてゐ
が、書名をいろは順に並べ、その各々につい
和本・唐本・朝鮮本等の區別、寫本・刻本の
別、版式・異稱・卷冊・刊記・大きさ等の主と
て形態に關する種々の事項をかなり詳細に
してゐる。又印本・繪多本・塙本・大内本・金
本・繪本・袖字本・車屋本・五色画版本・平賀
等の項目が數見してゐて、その説明も注目すべき點が少くない。この書は寫本で傳はつてゐた爲め餘り世に知られてゐないが、古版本を取扱ふものにとつて益する所多く、書肆取
上貴重な著述の一である。

る。外國でも人によつてはレジデンドの中に各へ不^存する種の俗信現象や民謡・歌謡の類を^有せしめようとする者もあつて、簡圖は近頃まで必ずしも精確でなかつたところが、我々の民間傳承の分類に於ては、是非ともこの語でなくては代表することの出来ない一群の事實があつて、他と混同すべからざる色々の特徴を持つてゐる。殊に「民間説話」との間には最も大切な差異があるので、後者の性質を明かにするためにも、是非ともこの二つを對立させることが必要である。それで近頃は追々とこの傳説といふ名稱を、限定して用ひる者が多くなつたのである。我々の定義では、傳説は口碑の重要な一體であつて、次に列記するやうな幾つかの點に於て、説話歌ひ物その他の口碑と區別して、考證せらるべきものをいふのである。今までの調査には一つの文字の單純なる解釋から起つたものもあるが、それよりも大きな原因は傳説と説話と、歴々同一の内容をもち、又は共通の起源を追溯し得るものがあつたことであるが、我々はそれがある故に一層分界の必要を認め、又その利益を説かなければならぬのである。この狹義の傳説の「民間説話」その他と異なるは、先づ(一)には形の無いことである。説話が如何に自由になつてもなほ若干の定まつた文句を持つて反して、傳説は首葉では傳はらずに、單にその實質を以て傳はつてゐることである。それ故に或は口碑の中にすらも加へがたく、寧ろ呪法禁忌等の俗信と、同じ列に置くべきだといふ説も成り立つのであるが、内容の聊絡は専ら口碑の方に存し、研究は少くともこれと共にするのが便であるのみならず、これと文學との深い關係も、實は傳説の「形を持た

「ね」といふ特質に基いてゐるのである。傳説に定まつた形が無いといふことは、常に新しい時代の言葉を以て、どのやうにも表現し得るといふ事を意味する。傳承者の才能や聽く人の立場で、長くも短くも強くも優しくも、色々に説き聽かせることが出来たといふことが、やがて旅人の先づ親しみを抱き、文藝の士がこれに據つて、次々に美しい想像を附け婚へる構築でもあつた。それを一面から見ると、傳説は殊に誤解と利用とによつて、速かに變化すべき傳承だともいふことが出来る。ところがこゝに(一)の特質があつて、幾分か又その傾向を抑制しようとしてゐるのである。それは何かといふと傳説は信ぜられてゐたといふことである。民謡童話は古い形を保留してゐるが、何人もその目的の人を樂しましめる藝術なることを知らぬ者がないために、趣味と便宜によつて或る部分はこれを抑制し、又は全然これを無視して新しい形に改めようとした場合も多かつたが、傳説は少くとも或る時代の人が、これを眞實だと思つてゐた故に、要へて誤りに陥ることを敢てしなかつたのである。今日は勿論、信する者が既に少くなり、單に嘗て信ぜられてゐたといふ事實を説くに過ぎぬが、それでもなほ全部を誤信なりと見ることの出来ぬ人があつて、所謂傳説の合理化、即ち歴史や自然史と調和させるべく、その一部の改造を企てるのである。各地の傳説の著しく歴史らしくなつてゐるのは、即ちこの改造の結果であつて、それは既に數世紀の前から始まつてゐる。(三)の特徴は傳説が説話の浮遊するに反して、必ず一定の土地又は事物に因縁してゐることである。例へば「白米城」(別名)の口碑は、全國に五十数箇所

を算するに拘らず、一つとしてそれが自分の土地に於て現にあつた事實である事を主張せぬ者はないのである。従つて傳説の盛時は交通が未だ十分に開けず、見聞が地方に制限して居つた時代であつて、一朝比較が始まると解釋は乃ち改まらざるを得ないのであつた。

【傳説とその主體との關係】 傳説とその主體ともいふべき樹木・岩石、その他塚・堤・橋・清水等との關係は、普通今日の保存者が考へてゐる所と、或は少しばかり違つてゐたのではないかと思はれる。即ち物が存して説明がこれに伴うたのでは無く、物は却つて言ひ傳への信じ認められたことによつて、後に漸く著名になつたらしいのである。山嶺沼湖の如き天然の地物に於ては、傳説によつて尊かれたものは單にその現在の名稱だけであるが、他の色々の小さな人工物には、往々にして傳説を記念し又は確實にするために、新に設け備へられたものもあつたやうである。樹木はその中でも殊に明白なる例であつて、稀に當時の木と稱するものも、多くは傳説よりは若く新しく、また枯るゝに從つて更に植ゑ継ぎをする慣習も残つてゐる。塚や石塔の類にも同じ例はあつて、現に今日にまで續いてゐる。岩石は人意を以て左右し難いものであるが、それでも、山野に數多く横たはつてゐる中から、さもあるべき一箇を認定して、これが傳説の何を石だと決めた場合が多かつた。それ故にこれ等異常なる地形地物が、即ち傳説の根源であつたといふ想像は誤つてゐる。傳説には別にこれを發生せしむるべき社會上の原因が無ければならぬので、それは恐らく、これを永年に亘つて保管した人又はその集団の心意に求むべきものだと思ふ。從來の傳説分類

者が、樹木・岩石・塚・沼等の傳説と對して、家・村・社・寺などの傳説といふ目を立てんとしたのは、この意味に於て正しくなかつた。何となれば一方はその主張者若しくは利用者であり、他の一方は單なる記念方法に過ぎなかつたからである。これと同様に多くの歴史上の人物の傳説の上に現れて來るのを見て、これを英雄傳説などと謂ふのも理由がない。多くの傳説は、必ずしも最初から、その英雄のために語られたものではなく、英雄は單に成る種の傳説の古き尊さを確保すべく、次々に招き請ぜられるのが普通であつたからである。傳説の主たる興味は、寧ろこれ等の手段を盡して、これを永代に保存し又主張しなければならなかつた理由、即ち土地の前居住者たちが、さしも強烈にその眞實を信じようとした點にあつた。神話傳説といふ語は屢々連繫して使用せられ、甚だ無意味なことのやうに批評せられてゐるが、説話が單にその叙述の外形のみを承け継いでゐるに反して、傳説は昔はば神話(別項)の實質を、やゝ断片的ながら把握してゐたのであつた。祭祀の方法は既に改まり、信仰の指導權が新來者の手に移つて後まで、なほ以前の感銘の一部を持ち傳へて、たとひ無意識にもせよ、百方これを固守しようとしてゐた點に、文化史料としての價値が大きいのである。日本の傳説が全國を通覽して、その種類必ずしも豊富ならず、屬々遠隔の地の一致共通が認められ、而も後代の各種文獻の上に、極めて濃厚なる陰影を投げてゐることは、民族結合の強烈なる一島帝國に於て、始めて遭遇し得べき過去精神生活の一傳頌と言つてよからう。

者】平田篤胤【成立】文化十三年十二月、夏目癡齋から小林茂岳の「天説辨」と『靈能真柱批評』とを送つて來たのを見て、これを反駁した論考で、同月十八日執筆。翌文化十四年一月七日稿了。これに門人川崎重恭が添書して刊行してゐる。【諸本】平田篤胤全集第二所収【内容】宣長の正系を以て任する本居大平一派とその古道説の後繼者として自任する篤胤派の人々との間の論争書の一で、主として天に關する問題を論じてゐる。これより先、『古事記傳』十七の附錄として載せられてある服部中庸の「三大考」(別項)に對して大平の「三大考辨」が出てその所説を駁し、次いで篤胤が「三大考辨々」を出して大平説を駁したが、これに對して更に、中庸の「三大考」の所説は宣長所説と同一ではなく、随つて宣長がこれを附錄としたのは、唯その熱心や努力を認めただけで、内容そのものを認めたのではないといふ立場から、「三大考」や、それによつた「靈能真柱」の天に關する説を非としたのが、茂岳の「天説辨」である。そしてこれにはその師大平が背後にある、同門の鈴木狼なども示唆するところがあつたらしい。既に「三大考辨々」を出してゐた篤胤としては、これに對して、新に説明の要を認めなかつたけれども、門人の切なる勧めもあり、且つ門下中にもこの説に動かされるものがあることを知つて、再び反駁を試みたものが本書である。論争の點は、篤胤が天地を產靈神の生み成せるところとしたのに對して、茂岳は、天地は天御中主神よりも以前に存したとするに在つたが、本書ではこの茂岳説を更に否定して、「日即天」「月即泉」説を主張し、宣長が中庸の「三大考」を削除したのは「三大考」の所説そのものを認めた

土地に於て現にあつた事實である事を主張せぬ者はないのである。従つて傳説の盛時は交通が未だ十分に開けず、見聞が地方に制限して居つた時代であつて、一朝比較が始まると解釋は乃ち改まらざるを得ないのであつた。

【傳説とその主體との關係】 傳説とその主體ともいふべき樹木・岩石、その他塚・堤・橋・清水等との關係は、普通今日の保存者が考へてゐる所と、或は少しばかり違つてゐたのではないかと思はれる。即ち物が存して説明がこれに伴うたのでは無く、物は却つて言ひ傳への信じ認められたことによつて、後に漸く著名になつたらしいのである。山嶺沼湖の如き天然の地物に於ては、傳説によつて尊かれたものは單にその現在の名稱だけであるが、他の色々の小さな人工物には、往々にして傳説を記念し又は確實にするために、新に設け備へられたものもあつたやうである。樹木はその中でも殊に明白なる例であつて、藉に當時の木と稱するものも、多くは傳説よりは若く新しく、また枯るゝに従つて更に植ゑ継ぎをする慣習も残つてゐる。塚や石塔の類にも同じ例はあつて、現に今日にまで續いてゐる。岩石は人意を以て左右し難いものであるが、それでも、山野に數多く横たはつてゐる中から、さもあるべき一箇を認定して、これが傳説の何を石だと決めた場合が多かつた。それ故にこれ等異常なる地形地物が、即ち傳説の根源であつたといふ想像は誤つてゐる。傳説には別にこれを發生せしむるべき社會上の原因が無ければならぬので、それは恐らく、これを永年に亘つて保管した人又はその集群の心意に求むべきものだと思ふ。從來の傳説分類

者が、樹木・岩石・塚・沼等の傳説と對して、家・村・社・寺などの傳説といふ目を立てんとしたのは、この意味に於て正しくなかつた。何となれば一方はその主張者若しくは利用者であり、他の一方は單なる記念方法に過ぎなかつたからである。これと同様に多くの歴史上の人物の傳説の上に現れて來るのを見て、これを英雄傳説などと謂ふのも理由がない。多くの傳説は、必ずしも最初から、その英雄のために語られたものではなく、英雄は單に或る種の傳説の古き聲を確保すべく、次々に招き請ぜられるのが普通であつたからである。傳説の主たる興味は、寧ろこれ等の手段を盡して、これを永代に保存し又主張しなければならなかつた理由、即ち土地の前居住者たちが、さしも強烈にその眞實を信じようとした點にあつた。神話傳説といふ語は屢々連繫して使用せられ、甚だ無意味なることのやうに批評せられてゐるが、説話が單にその叙述の外形のみを承け継いでゐるに反して、傳説は言はば神話(別項)の實質を、やゝ斷片的ながら把握してゐたのであつた。祭祀の方法は既に改まり、信仰の指導權が新來者の手に移つて後まで、なほ以前の感銘の一部を持ち傳へて、たとひ無意識にもせよ、百方これを固守しようとしてゐた點に、文化史料としての價値が大きいのである。日本の傳説が全國を通覽して、その種類必ずしも豊富ならず、屢々遠隔の地の一致共通が認められ、而も後代の各種文藝の上に、極めて濃厚なる陰影を投げてゐることは、民族結合の強烈なる一島帝國に於て、始めて遭遇し得べき過去精神生活の一縮影と言つてよからう。

者】平田篤胤【成立】文化十三年十二月、夏
目癡齋から小林茂岳の「天説辨」と『靈龍柱』
批評とを送つて來たのを見て、これを反駁
した論考で、同月十八日執筆、翌文化十四年
一月七日稿了、これに門人川崎重恭が添書し
て刊行してゐる。【諸本】平田篤胤全集第二
所収【内容】宣長の正系を以て任する本居大
平一派とその古道説の後繼者として自任する
篤胤派の人々との間の論争書の一で、主とし
て天に關する問題を論じてゐる。これより先、
『古事記傳』十七の附錄として載せられてある
順部中庸の「三大考」(別項)に對して大平の「三
大考辨」が出てその所説を駁し、次いで篤胤
が「三大考辨々」を出して大平説を駁したが、
これに對して更に、中庸の「三大考」の所説は
宣長所説と同一ではなく、随つて宣長がこれ
を附錄としたのは、唯その熱心や努力を認め
ただけで、内容そのものを認めたのではない
といふ立場から、「三大考」や、それによつた
『靈龍柱』の天に關する説を非としたのが、
師大平が背後にあり、同門の鈴木龍なども示
唆するところがあつたらしい。既に「三大考
辨々」を出してゐた篤胤としては、これに對し
て、新に説明の要を認めなかつたけれども、門
人の切なる勧めもあり、且つ門下中にもこの
説に動かされるものがあることを知つて、再
び反駁を試みたものが本書である。論争の點
は、篤胤が天地を產靈神の生み成せるところ
としたのに對して、茂岳は、天地は天御中主神
よりも以前に存したとするに在つたが、本書
ではこの茂岳説を更に否定して、「日即天」(月
即泉)説を主張し、宣長が中庸の「三大考」を附
録したのは「三大考」の所説そのものを認めた

文獻卷之二

用ひられる。佛名も經題

なつて居り、論議に用ひられる。佛名も題を節付けて擧げるものである。三禮・如來六種は簡単な法要の講經作法の前後に用ひられる。八句念佛は六道講式等に用ひられる。佛解説で、甲乙あれば十六句の念佛である〔聲明と類似の音譜を附せる講式〕諸佛・諸菩薩・諸天神祇等教多あるも、茲には多く使用する五六句の講式である。二十五三昧大六

に交渉があつた。尤も禪明も宮中雅樂並に
樂に指示されること甚大であつたが、現時
へられる體馬樂・朗詠(各別項)の音譜等を見
に、その殆どが禪明の博士そのものであつて
ただ音律が雅樂律と云ふに外ならぬ。その
平曲・謡曲(各別項)等の音譜を見るに、情壁
の博士に據つてゐる。魚山が音曲として宗
に屬する二となく研鑽し、音宗と音事によ
く善

掲げたるもの。史詩諷歌の類、瞑想詩、短歌等に分類せられる。處女詩集であるが同時に、晩翠の最高處の詩境を示してゐるところに彼の詩價がある。(土井晚翠著者)

年十六」とあるによれば、御壽は四十六だつた事になる(興福寺年代記等も四十六歳說)。併し四十七・四十六說は、御弟天武帝の御壽と比べると、天智帝の方が御年少となる不都合がある故、五十八說に従ふべきである。【御陵】山城國宇治郡山科村大字御陵の山科陵。【系圖】舒明天皇と泉姫帝との御子、御同腹の御兄弟が

式○往生講式○涅槃講式○舍利講式○觀
講式○地藏講式○毘沙門講式。〔天台聲明
同一の博士による各宗解説〕 聰密要略〔南
○聲明〔西大寺所用〕○聲明〔妙音院說〕○聲明
向集大藏寶瓶〔淨土宗瑞長寺〕○華頂圓山聲明〔
土宗知恩院〕○大源聲明集〔融通念佛宗〕○龍谷
唄〔二卷帖・真宗本願〕○梵明〔五帶帖・三帶帖圓山
真宗末派〕○圓頓山聲明集二冊〔真宗興正寺〕

とは、資料の存することであり、多くの歴史を持つてゐる。淨土・禪・日蓮・眞宗等の所を聲明本を見るも、悉く天台聲明と云ふべきである。眞言宗に於ても東寺・仁和寺・醍醐寺等總て天台流の音譜を用ひてゐたが、近頃は寧ろ野流の音譜を用ふるに至つた。奈良に用ひられる曲線の圓博士の一部を除いては、本邦今土の聲明は天台系に屬してみると云ふも過言

ても同様である。やゝ概念的な行き方ではあるが、生活を基調とした詩歌の主張はまさしく現はれる。一面、思想家としてまた志士的な熱狂興奮が滲れてゐる。この事が大方の反感を買つて、その例言にいふが如く、芭歌、語類實漢、經洋、露骨等の批評を受けたのであらう。作者は例言に於て、「難取なる興奮烈にとどまらずして今數倍深刻なる御手術に通

御二方ある。御兄弟や皇后、御宮の子孫、國文學に關係のあるのは、「萬葉集」にその作品の見える天武天皇(別項)・鏡女王・額田王(別項)である。

聲明（日源京身延山）○解明（日源京本願寺）○
漢譯式（釋迦宗）○地藏譯式（釋迦宗）（佛母經、
法華經等は翻訳形式よりこの部に属すべきものである
〔特許なる博士を譯せるもの〕法則集（真言、
仁和寺・東寺・三寶院古流）○修學兩項（諸國京古流）
○太子講私記（法相京法難寺古流）○八名齊集
羅尼經作法（古流國博士）○阿彌陀經（古流國
士）○聲明修正修二法則（諸國京）○四箇法要（
相宗）○圓通悟摩（諸國京）○満式（諸國京）○
業和諦（辨定）○解明（真宗大谷派）○光山法解
（日源京本願寺）○沐歌（各宗供養所用）○五音
士（真言宗）○假博士（真言宗）○平曲・滿曲・淨
羽等。

したのと等しく、聲明も邦樂史上に及ぼせることは決して渺くない。(聲明・音譜参照)

【参考】管絃音義疏全(釋書類從一二)○聲明甲心集真智○聲明目錄悟智○魚山目錄冥快○諸聲明口傳簡略及注闇珠○彈箏齊言抄書類從第一二)○音曲福要抄愚然○聲明點照抄桂運○聲明要抄立言○聲明琴北知東置○聲明音律知空○聲明口傳(大原三千院文庫藏)

(註)

天地有情 てんじやう 詩集【著者】土井晚翠【刊行】明治三十二年四月、博文館。【解説】詩四十首、附錄にカアライル、シェリ、ジョルジュ・サンド、エマスン、ユゴオ等の論評を収めてある。暮鐘、星月秋風五丈原、星と花、馬前の夢、夕の思等を代表作とする。もと「帝國文學」と「反省相處」(中央公理)とに

傳統的概念論をすてて純正詩學の立場で批評家に取へと宣してゐるのである。生活を基調とした詩歌への運動は同時に現代語の完成を豫期したには違ひないのであるが、その效果の點では未だ薄弱であつたといへる。〔内藤〕

天智天皇 てんち 歌人 **【御詩】** 天命
開別天皇（あめのみことひらかすわけのすめらみこと）。御即位前の御名を葛城皇子、また中大兄皇子と申す。『萬葉集』卷一・二の標題には、近江大津宮に御宇天皇（あめのしたをさめたまひしすめらみこと）とする。【生歿】異説があるが、皇紀一二七三年（推古帝の第二十二年）御誕生。一三三一年崩御。寶算五十八と見る説（神皇正統記、重統錄、皇年代略記、総運錄等）に従つておきたい。「法玉帝說」に「應神天皇四年乙巳、近江天皇生年二十二」とあるによれば御壽四十七。

種天皇重祚（齊明天皇）されてからも、皇太子として政を攝られ、齊明天皇崩御あるや第三十八代の御位をつがれた。從來代々の惱みであつた對韓問題に對して、全然交渉を斷つて専ら内治に努め、唐の制度を倣似て諸制度を改められ、一三二七年三月（天智天皇の第七年）に、從來大和飛鳥の地に在つた都を近江大津の宮に遷された。これは革新の功を歎むるためであつたが、人庸が「如何様に思ほしめせか」と歌つてゐる如く、時人に理解されず急進的な改革を喜ばぬ保守派の貴族家族から多くの非難が起つた。その後、滿三年後の一三三一年未だ近江朝廷の基礎固まらぬに崩じ給つた。御弟大海人皇子（天武天皇）と御田王を争はれたことが御製によつて知られる（御田王參照）。又御田王の御姫鏡女王の御歌によつて、鏡女正をも召して居らるゝこと分かる。（御田王參照）

「萬葉集」卷一の「中大兄ノ三山ノ歌一首」と題のある香具山・献火・耳梨三山の争奪に託して天皇御兄弟と額田王との無の争を現はされた長歌。その次に載する「渡津見の豐旗雲に」の短歌及び「萬葉集」卷二相聞部の第七首目に載する「天皇賜。鏡王女御歌一首。妹が家も云々」以上わづかに四首が信憑するに足る御製である。この外の御製は散佚して今日見るを得ない。このうち三山の長歌の反歌の第二番のものは、純粹な叙事歌であつて、三山の長歌に對する反歌ではないと思はれる。現にこの歌の左註に、「右一首歌、今案不似。反歌」と解説、「但舊本以此歌載於此反歌故入猶載。此次」と解説してゐる。これによつて古くから三山の歌の反歌でないと云ふ説もあつた事が分る。反歌でないならばこの短歌は、前記の「中大兄ノ三山ノ歌」といふ題とは無關係となり、従つて天皇の御製は更に一首を減じて三首となるわけである。併しこゝには暫く普通の説に従つて、「渡津見の」の歌をも御製だと見ておく。この外に、「新千載集」「後撰集」「玉葉集」及び「新古今集」に、天皇の御製として載するものは、果して御製であるかどうか疑はしい。【御人絃】雄傑果斷、極めて急進的な御性格であらせられた事は、入鹿誅滅のことや大化改革等の事件が示してゐる。額田王を無理に召された事も、この御性格によるものであらうか(額田王參照)。

自身の體の争の體とされたと云ふ特殊な題材である點にある。單に題材のみでなく、表現も亦、技巧の巧みの全くない素樸な力強い表現を有してゐる。その他の御製も、一首の調べがゆつたりして、如何にも御製と云ふ言葉にふさはしい歌詞である。

【叢書】

天地剖判説話

〔てんぢつけう〕 神話【名義】

初め密接してゐた天空と大地とが、或る原因若しくは機縁によつて、相互に分離して今日の如く遠く隔離するに至つたことを説く説話を云ふ。【解説】天地剖判説話は、唐鏡に於ける宇宙創成神話(別項)の一部に屬すべきものである。併しそこに働いてゐる民族的説明心理はやゝ特殊的である。普通の宇宙創成神話が、事物そのものの發生起原を説くことを中核としてゐるに反し、この説話にあつては、天地が既に發生してゐる事を豫定し、ただ二者がいかにして分離したかを説明する事に力點を置いてゐる。そこに働いてゐる推原的心理は、生成に關せずして狀態に關してゐる。そこにこの種の説話の特徴が存してゐる。

【説話】支那の一神話に、陽満なるものが天となり、陰満なるものが地となつたが、二者は相密接してその間に盤古が存してゐた。日に長すること一丈、それがために一萬八千歳にして、天地は遠く相離るゝに至つたとあり、ニージーランドの神話に、天空ランギ(Rangi)と大地ババ(Papa)とが、太初に相抱擁してゐて、その間に多くの子が生れたが、兩親の間に挟まつてゐる窮屈さに耐へかねて、樹木の神タネマフタ(Tane-mahuta)が頭を大地に脚を天空に當てて、力任せに兩者を押し離してしまつたとあり、サモアの神話に海蝕が天地の間に體を立てて天を今日の高きにおし上げてしまつたとあり、サモアの神話に海蝕が天

げたとあり、印度の神話に、天空が大地にね
しかぶさつてゐる體陶しきに、一少女が築で
天を觸つたので、天は怒つて遠く去つてしま
つたとあり、その他、埃及・南洋等にもこの種
の説話が見出される。アンドリュー・ラング
(Andrew Lang)は、クロノス神(Kronos, Cro-
nos)が、大地ガイア(Gaia)にそゝのかされ
て、夜毎大地を訪れる天空ウラノス(Uranus,
Ouranos)の生殖器を鎌で切り取つたといふ
希臘神話をも、天地剖判説話の變容であると
してゐる。隔離せらるゝ天地が生物觀せら
るゝと物質觀せらるゝとに拘らず、また隔離
の手段が何であるに拘らず、この型の説話に
働いてゐる共通心理は、天と地とが宇宙間に
あつて一の相對的存在をなし、然く遠く相離
れてゐるといふ事實に対する自然民族の驚異
から來た説明要求である。「日本書紀」の日月
神出生の條に、「故ニ神喜曰、吾息雖多、未
有ニ若此靈異之見、不宜ニ久留ニ此國、自當ニ早
速ニ于天ニ而授以ニ天上之事ニ、是時天地相去未
遠、故以ニ天柱ニ舉ニ於天上ニ也」とあるのも、
初め天地が相接近してゐたのが、後に分離し
て遠く隔るに至つたといふ觀想を示唆してゐ
るとしなくてはなるまい。

その調子又は音階を他の調子又は音階に轉ずることをいふ。例へば、三味線曲に於て本調子から二上りに轉じ、二上りから三下りに移るとか、又は呂旋の音階から律旋の音階に移るとか、或は田舎音階から都節音階に移る等のことを見て轉調といふ。

〔田道〕

天地麗氣記 〔てんちりき〕 神道書 〔解説〕
「麗氣記」の中の一部。「麗氣記」は佛教を以て神道を説いたもの。空海の作で高野山に祕藏せられたものと云はれるが、偽作たるは諸家の一致する所。偽作の年代は明かでないが、後醍醐天皇元應二年に出來た「類聚神祇本源」に引用してあるのを見ると隨分古きものなるべく、恐らくは「神道五部書」とほぼ同じく鎌倉時代の初期か。「麗氣記」の内容は「天地麗氣記」「神號麗氣記」「三界表麗氣記」「神形注麗氣記」「萬體靈瑞麗氣記」「神號諸麗氣記」「神天上地下次第麗氣記」「降臨次第麗氣記」「一所大神宮麗氣記」「天照皇大神麗氣記」「豐受皇大神麗氣記」「心柱麗氣記」「佛法神道麗氣記」等に分たれ、到る處眞言教理と神道との習合を見る。續群書類從第三輯に收む。

〔田中（著）〕

田田太鼓 〔たんたんとう〕 「鼓」を見よ。

天道浮世出星操 〔てんどううきよしゆうせいさう〕 〔てらだとううき〕 黄表紙
三冊 十五丁十九圖 〔作者〕 式亭三馬 〔癡工〕
歌川国芳 〔名稱〕 世界は操の劇場であり、人間の行為は天帝の案じで、多くの星が出づかひをするものであるとの義。〔刊行〕 宣政六年西宮板 〔諸本〕 黄表紙百種（續帝國文庫）。黄表紙集（近代日本文學大系）に本文を收む。

〔梗概〕 〔上冊〕 (1)自序。(2)帳場格子の中にをさまつた天帝、金銀星その他の星、雷風雨の神たちに案じと語つて、下界の出づかひを

ヒルズ

جایزه

Grey, G. : *Polyesian Mythology* ||
Gill, W. W. : *Myths and Songs from
the South Pacific*. || Turner, G. Samoa. ||
Parker, H. : *Village Folk-tales of
Ceylon*. || Budge, E. A. W. : *The Gods
of the Egyptians*. || Lang, A. : *Custom
and Myth*.

[参考]

書世 ヨシ「歌詩」ノルマ。
舞露 ハル 普樂【歌詩】樂曲の箇中。

天道浮世出星抄 よのでづかひ 黄表紙
三冊 十五丁十九圖 【作者】式亭三馬【畫工】
歌川豊國【名稱】世界は操の戲場であり、人
間の行爲は天帝の案じで、多くの星が出づか
ひをするものであるとの義。【刊行】寛政六年
年西宮板【諸本】黄表紙百種（豊帝國文庫）・
黄表紙集（近代日本文學大系）に本文を収む。
【梗概】【上冊】（1）自序。（2）帳場格子の中
にをさまつた天帝、金銀星その他の星、雷風
雨の神たちに案じを語つて、下界の出づかひ

を命する。(3)天帝人間に魂を授ける。魂に親子兄弟などの因果の縁を細ちつと(4)部屋住の二八星が色・慾・非道の惡に吹されて、仁義禮智などの善星を放逐遊説を志にする。(5)二八星、天帝に對反意を起し、まづ下界に惡法を弘めよう。色慾・酒・非義・非道などの惡星下界する。(6)二八星、夜遁星に命じて、天帝寶如意寶珠を奪ひとる。〔中冊〕(7)二八星の手下の酒星、堪忍星を逐ひ退けて、一狂暴にする。(8)慾星、金銀星を逐ひ退人間に借金をさせる。人間ども借金の益難益してゐる。(9)堪忍・禮・正直・孝・仁の善星、人間に儒書の會讀をさせる。厚も、手出しがならずに困つてゐる。(10)ども、人間に女郎買ひをさせる。(11)不孝星につかはれた息子乞食姿となる。一人の息子の遊ばうとするのを、堪忍星抑へてゐる。(12)善星、正直者に金を給る。〔下冊〕(13)惡星ども盜賊根性のあを啖して盜賊を勵かせる。善星犬を吠える。(14)惡星ども娘をつかつて姑に捕つる。(15)惡星ども息子を二日酔にして寝せる。父母枕もとに心配してゐる。三人の隸で繫がれてゐる。(16)慈悲善根の者星につかはれて、益々富み榮える。主従兩箱の陰にゐる。(17)善惡の星、相争つて悪星ともみな追ひ拂はれる。(18)天帝二八星を捉へ、心の眞神へかけ、肝心要石で體をとる。體内から十五の星飛び出す。(19)善星となる。惡星ども石ころとなつて界に追ひ下される。天帝の御座のほとり星のみゐる。(20)天帝、千兩箱を積み重前で算盤を彈き、泰平の春を楽しむ。

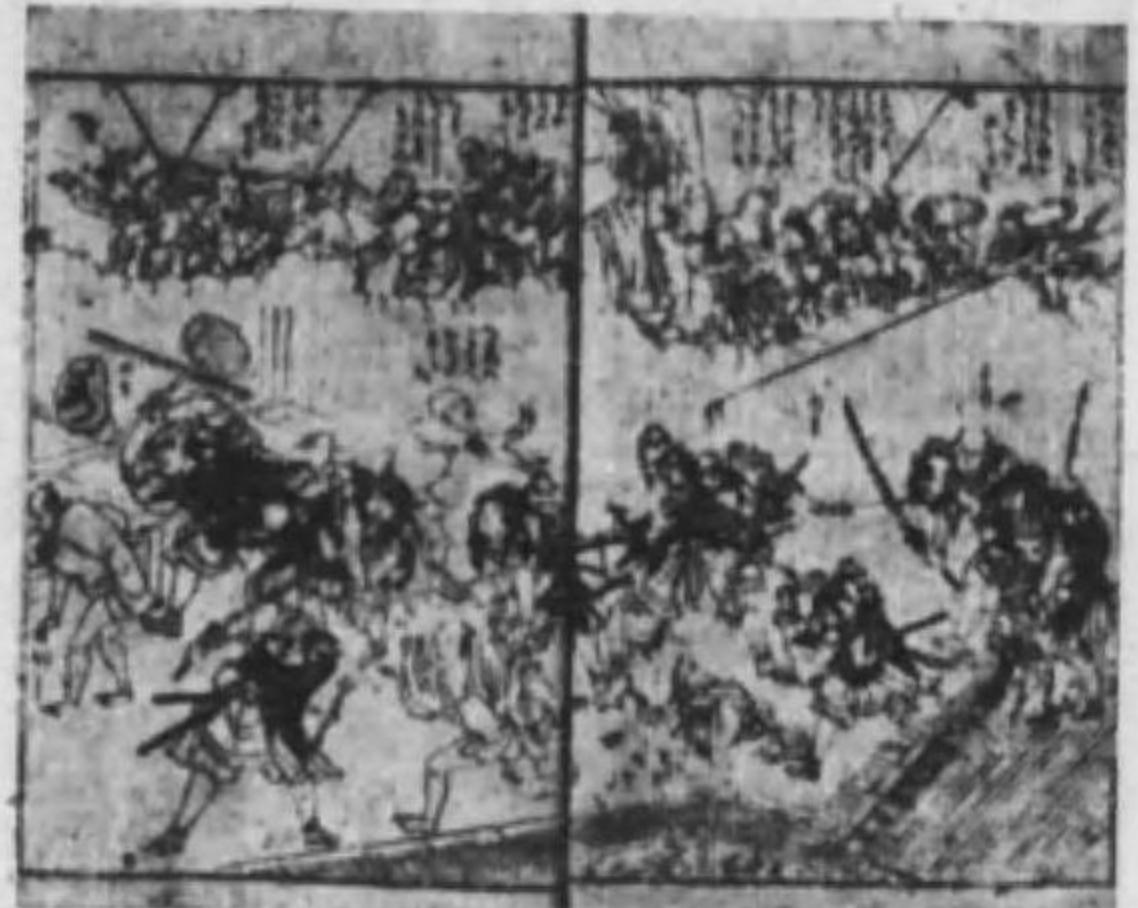
【構想】人間世界の善惡の出來事は、すべて善星・惡星の操るためであるとし、その間に因果關係の存在を知らせようとしたのが、一篇の作意であるが、未だ首尾一貫の趣向を得るまでになつてゐない。人間の魂と善星・惡星の關係の如きは、甚だ不徹底である。【史的地位】この作は、三馬二十歳の處女作として注寫すべきである。自序の中に、「まだ初舞臺の御目見得に、廻らぬ筆の操狂言」といつてゐる。作の趣向は、善惡の對立において、京傳の作「心學早染脚」(別項)及びその第三篇「堪忍袋精メ善玉」の影響から出てゐることは、極めて明瞭であるが、三馬は更にそれ等の粉本である喜三二作の「天道大福帳」(別項)をも參照してゐる。世界を戲場に見立てる事と、また京傳の善魂・惡魂を善星・惡星に轉用したことが、その證左として考へられる。尤も三馬の工夫は、操の出づかひとした點にあつたらう。この事は「天道大福帳」また「心學早染脚」及びその後篇に見られない趣向である。しかし、これとても京傳作「四人詰兩片傀儡」から暗示を得たやうである。京傳のその作は、「浮世出星操」の前年の刊行であり、趣向は例の善魂・惡魂の關係を、鬼と佛の操る南京あやつりに變へたものであつた。

〔山口〕

天道大福帳 ふくぢやう 黄表紙 三冊
十五丁十七回 【作者】朋誠堂喜三二【書工】
北尾政美【名稱】「新建立忠臣蔵」の角書がある。【諸本】後摺に「繪本國土産」がある。

【梗概】親孝行の人があると、その氣は濃つて小判となり天に昇る。忠臣はその氣が濃つて小粒となり天に昇る。それゆくの善行によつて丁銀・小玉・南鏡・鏡などとなつて昇天する。惡事をするとその氣は火となつて昇天し、天

の金氣を減らす。五倫の道が正しいと天が喜む。天の川の鋪は皆藏である。下界で師直・若狭介・鹽谷判官が對坐してゐ、師直は若狭介を密めると、天上で天人がそれを帳面につける。天帝が唐の方を向いてゐた折に鹽谷判官が師直を斬る。天人が祇園町の方を見てゐる暇に定九郎が興市兵衛を殺したので、天人は熊手を以て、勘平の脛ひを定九郎にかへて撲たせる。祇園の茶屋でおかるが鏡で由良之介の手紙を讀む時、天人は熊手を伸ばして早く替を落すがよいと示す。山科の由良之介の宅で小浪をとなせが殺さうとすると、天人は振り上げた刀の柄頭に熊手をかけて、お石が御無用と云ふ迄は必ず離すなど命ずる。討入の場では、天道を中心にして雲の上から多數の天人が熊手や齧を持つて見下してゐる。天道は相談の上、四十七士切腹の後天に召して由良之介父子を北辰の手に屬せしめ吉原を守らせ、その他を深川・品川・四谷等に割り振る。品川には今も九曜・七曜の形をのこす。吉原を辰と云ふは衆星がこれに向ふ意味。義士の忠節が夥しい小粒となつて天へ昇り、四十七藏が建てられ、假名手本忠臣藏と呼ばれる。



は口上に金銀星と言ひ、
川海老藏の鐵五郎が大富
小倉を建てたのをこの度
上にのぼせ、「假名手本忠
南者を因果關係で結合す
るせてゐる。【史的地位】

の中村座・市村座に於ける忠臣蔵をも思ひ出されたであらう。陰組には「天慶和句文」から得てゐる所が眼につく。

〔小説〕

天徳歌合 てんとく うたあはせ 和歌 【別名】天徳四年内裡歌合 【譜本】群書類從卷一八一・歌合部類所收。類從本は番頭に漢文の御記及び殿上日記、卷尾に左右假名日記があり、歌合部類本は、御記・殿上日記がない。寫本は内閣文庫・圖書室等に藏し、内閣文庫本には御記・殿上日記なく、又卷尾の日記も後半のみで念人の名跡はその文中に記し、その後に御記・殿上日記に代るべき假名文の日記がある。又歌人の名にも出入がある。【解説】〔図〕霞・營・柳・櫻・欅冬・藤・暮春・前夏・卯花・郭公・夏草・熙・以上十二。〔番旨〕二十番〔歌人〕左、朝忠・銀城・能宣・少貳命婦・忠見・頭・本院侍從の七人。右、兼盛・元眞・中務・博古・元輔の五人（内閣文庫本では左、肥城の次に膳野古が入つて本院侍從なく、右元輔がなくて四人になつてゐる）。〔譜師〕左、延光。右、博雅。〔判者〕小野宮左大臣實嗣。〔念入〕左は頭、中將更衣（帽子）以下女十二人、男十五人。右は頭、辨更衣（名不詳）以下左と同數。村上天皇の天徳四年（九六〇）三月三十日、清涼殿に於て催された歌合である。御記に「去年秋八月、殿上侍臣間詩合二時、典侍・命婦等相詠云、明日」間ニ文章ハ女宣合ニ和歌」とあり、即ち、前年の殿上侍臣詩合に刺取せられて計審されたものである。この歌合の行はれた状況は、「御記」「殿上日記」「左右假名日記」によつて知られるが、その大がかりなこと前例なく、例へば洲瀬の如きも、左は沈にて山を作り鏡を水にして、洲には白銀の御二つ立て、黄金の山吹に銀の葉に歌書きて鶴に食はせ、花足は紫檀を作りて銀の筋

を入れ、下机は蘿芳にして同じく鉢の筋を入れる。足結の鉢覆は蘿末演・童手を軸にし、覆の臺は白銀を竹の形に作つて打數はえび染童女六人赤色に櫻葉着てこれを昇く。右は沈の山、鏡の水に沈の舟を浮べ銀の河曲二つ、沈を作り金の筋を入れる。淺香の足結の鉢、末濃の鏡、青朽葉神物の覆ひに柳鳥の形を軸ふ。臺には柳の枝を作り淺縫の打數をし、童女四人青色に柳製着てこれを昇くのである。洲演は「在民部卿家歌合」(別項)の頃より用ひてゐるが、元は單に歌を置く臺に供したものであるが、遂にかくまでに華麗となつた。次に判詞は延喜十三年の「女子院歌合」にも既につけられてゐるが、各音母につけられたのは、今度の體に始まつてゐる。歌合としての規模こゝに全く備はり、以後の歌合の規範となつた。その點で、この天德歌合は、史的意義深きものである。(歌合參照)

右方、共に文臺を立て、左方の詩人・念人（世人）は玉階の南面に列座し、右方の詩人・念人等は玉階の北側に列座した。同四刻、指揮（即ち歌合の時の御調）の小舎人及び左右が出揃つた。やがて左右の人達が詩を入れた匣を持って昇殿し、睦行して御前に置いた。次に左右の四位各二人を召して、講師と讀師を定められた。左は國光朝臣が講師、保光朝臣が讀師となり、右は文範朝臣が講師、延光朝臣が讀師に仰せ付けられた。それから左右の紙燐が召され、續いて大江雅時が勅を奉じて判者となつた。左右の讀師は各々第一の詩を匣の蓋の上に置いて式は始められた。この式は歌合の時と同一であつた。後の詩合は皆この式に従つてゐる。（詩合參照）

【参考】天德開時行事略記（初發一三四）（白井）
傳内流（切取）「書道」を見よ。

天人物の謡曲（てんにんもの）【曲目】天人を主人公とした謡曲に「羽衣」及び「吉野天人」がある。【諸本】現行諸流謡本。謡曲叢書（芳賀・佐佐木）・日本文學大系・國民文庫・謡曲三百五十番集（日本名著全集）等所収。

【羽衣】三番目【作者】世阿彌（佐木作者註文、二百十番謡目錄）【内容】駿河國三保松原の酒夫白龍（ワキ）が、浦の景色を眺めてみると、松の枝に美しい衣がかゝつてゐたので、持つて歸らうとする。そこへ天人（シャ）が来て、それは天人の羽衣だから、そのままに置き給へと呼び留める。白龍は羽衣と聞いて愈々喜び、末世の奇特に留めて置いて國の寶にしようと、いつて返さない。天人も羽衣がなくては天に上ることが出来ないので、しをくと歎くと、白龍もあはれに感じ、天人の舞樂をここで奏して下されば、衣を招還ししよう」と、

ふ。天人は喜んで、東遊の駿河舞を舞ひ、やがて上天するといふ曲。【題材】「神社考」によれば、「駿河國風土記」にこれと同様な説話があつて、總川期まで遺つてゐたらしい。本曲は即ちそれに據つたのであらう。一段劇能。五流現行。

つてゐた。彼が俳諧などに屢々池田の人とて記されてあるのもそのためである。壯年の頃から俳諧を嗜み、最初は直門系の雨喫堂禪田舎石に従つてゐた。寶曆二年の一「双林寺千句」(別撰)には、雨喫堂連中としてその名が見え、寶曆末年頃まではなほ舎石や早川丈石等の徒と交つてゐた。然るにその妻が燕村門の寺村三貫(百瀬の父)の妹であつた關係から、やがて燕村に近づくに至り、明和五年七月四日、三貫の大来堂で催された三葉社中の會には、初めて田嶋の名が見られるやうになつた。

爾來彼が夜半亭門の先輩として重きをなしてゐた事は、幾年「燕村句集」が出版された時、その跋文をものしてゐる一事によつても推察される。勿論彼は几童や大魯とは違つて、俳諧を専門にやつた諱ではなく、その句も敢て異色に富むといふのではないが、溫柔優雅の句品は又自ら一家の風格をなしてゐる。

【参考】池田人物誌吉田鶴丸・羽東鶯○田福句集
乾木水(無著昭和三ノ二)

天賦人權論てんぶじんけんろん 論文 【著者】
馬場辰猪【刊行】明治十六年一月【由來】加藤弘之の「人權新説」(前項)が天賦人權説を排諱し、「自由自治平等均一」の権利は、決して天賦にあらず、世道の開明によつて、漸次に生じ、且つ進化したものである云々との主張に對し、それを論破するためにはしたものの。【内容】著者は逐條、加藤氏の説述を批判し、「人權新説」の著者が、吾人人類は千種萬種の競争を以てせる一大修羅場であり、この修羅

場に在つては、體質心性に於て、遺傳と變化の優良なるものが勝を獲、劣悪なる者を倒してこれを制するは、永世不易な萬物法の一大定規であると、スペンサア、ダーウィンの英國進化説を適用した民權否定論に對し、著者はルソオその他の自由人權説を支持する。人類は本能的に自己保存の欲望あり、それがために幸福を求める、幸福を求めるんとすれば、抵抗の最も少い方面に働きかける。一國社會は人類の集合體で、被等が組織した社會の生存を保持せんとするにも、また障礙の少い道を擇

ぶ。障礙少き道とは人民の自由平等である。元來人類も、他の動植物も、宇宙萬物の、不消不滅の自然力の變化した現象であり、皆生存するための一つの目的を持つ。目的を達すべき道理は、いづれの邦國も一致し、運動の方法が、常に最も障碍の少い道に向ふ。それが自然の権利である。自然法から生ずる権利は、人爲の製作ではなくて、天賦人権である。佛國の革命の如きも、この人類自然の競争を抑壓した爲めに起つたとして、「人權新説」の著者が參政權と普通選舉を排斥するの愚論たるを指摘してゐる。【價值】「人權新説」の假論は五六種に上つたが、「天賦人權論」はその代表作ともいふべき著述で、引證該博、理論明快で、云ふべきものを言ひ盡してゐる。しかし學理的闘爭としての創意はない。價值は寧ろ當時の民權自由の思想に與へた功績の上で認め得べきものである。

介字點、个字點、胡椒點、梅花點、小涅點、
大涅點、鼠足點、菊花點、松葉點、垂藤點、
柏葉點、水藻點、椿葉點、攢三點、藻絲點、
尖頭點、平頭點、梧桐點、垂頭點、仰頭點、
攢三聚五點、鳳凰點、一字點、個筆點、小瓣
葉點、杉葉點、聚攢椿葉點、細葉點、刺松點、
夾葉點、个字間雙交鉤點、細垂藤點、仰葉點、
雨雪點、垂葉點、破筆點などをいふ。古今の
東洋畫家は、各々その慣用の點を用ひた。他
に點苔とか米芾の用ひた米點などがある。これ
も山水に於ける皴法の如く、法にあらずし

ば能はずとした。すべて東洋畫家は傳統的手法を重んじ、丈山尺樹、寸馬分人、遠人無目、遠樹無枝、遠山無石、圖々如眉、遠水無波、高興齊など形式を定め、個性はこれ等の形式を通じて筆先ににじみ出るものとなした。(參照) **天保佳話** てんぱうかわ 隨筆一冊【著者】才我老圃【刊行】天保八年【解説】著者が易を讀むことを好む所から、天保年度に見聞の事物・世相等を易の上より解説した隨筆で、天保通寶、朔日の十干にて豫め風雨を知、不織織機食、波打うた自然と起承轉合を具す、唐詩漢作者の數、天字、地字、二進が一十、一一が一、二一天作の五、子未行、五寶丹、黃耳杖、莫賀圓輪之、午頭天王の胡瓜、月に柄を、馬はぬれ、日本の地形蜻蛉に似たり、醉僧圖、六曜の占等二十餘項を錄す。圖畫二三を挿む。著者の友人寺門靜軒の序がある。案するに書名は俗言の「てんぼのかは」に擬したものと思はれるが、記事には諷諭の意趣がない。才我の傳不詳なれど、靜軒の序文によると、當時の漢學者の一人であつたらしい。才我は多分號名であらう。

天保時代に於ける俳壇の元老四人を稱する目
で、梅室・蒼虬・鳳朗（各別項）・卓池の四人を稱
する。その中、蒼虬が最も年長で、梅室が最も
年少であつた。天保元年に於ける四人の年齢
を比較して見ると、蒼虬七十歳、鳳朗六十九
歳、卓池六十三歳、梅室六十二歳で、而も四
人共長命で、その享年が卓池の七十九歳が就
中短命に屬し、蒼虬は八十二歳、梅室・鳳朗は
共に八十四歳であつた。四老人の目のある所
以である。連句の技倅は蒼虬が第一、世間的
聲譽の高かつたのは、梅室が第一であつた。



(附畫本繪演初) 供御理器官滿天

天満宮菜種御供てんまきの ごくう
九幕十七場 時代物【作者】並木五瓶【名
稱】五つ目、貧苦の中に在る武部源藏が「花の
色は蒸したる栗の如し」の詩句によつて、菜の
花を菅公武愛の松に供へ、「菜種の御供は百味
の飯食」といふ件による。【興行】安永六年三
月、大阪角芝居小川吉太郎座。

事があり、この梅を詠べき名譽の人たる事が判るので、右大臣に昇される。(同窓下・内裡門外) 時平の一味清貫・希世等は、道貫を讒すべく時平を煽動するが容れられず、時平は却つて禮を以て道貫を遇する。(二つ目) (道貫邸花園) 院の判官代禪圓と忍び通ひ子を設けた十六夜は、この花園の梅の木の下に捨児す

秀才母子を護つて席ちる。曲者が遣置邸から引退した源藏と争ひ源藏の手に片袖が残される。〔四つ目〕（長柄堤）源藏を尋ねる脚野を希世がつけ廻す。貧苦の中に替秀才を守る源藏は夜な夜なこゝに来て畠の物を盗んでゐるが、今日は百姓に見つけられて追はれる。脚野から金を奪つた希世は源藏の置いて行つたふごの中に隠す。〔五つ目〕（源藏住居）替公遣愛の松が一夜の中に庭に生えるので、源藏夫婦はそれを買取つて育てるが、代金に窮してゐる上に、代官所からは替秀才の首計てと誅命され、長柄の百姓からは糞糞しを責められる。紀長谷地が首受取りに来るが、松の木の精と名告る女が子供を連れて現はれるので、よい身代りと喜ぶ矢先き、長谷雄は標先を制してその兒を討ち、内に踏込んで替秀才をも討つて了ふ。併しそれは院の寵臣たる長谷雄夫婦の苦肉の計で替秀才は無事、自らの一子を身代りにしてたのであつた。ふごの中から現はれた以前の金が計らずも現はれて源藏の債務も済み、いつぞや争うた仕丁姿の曲者も長谷雄であつた事が判つて太政官の印も手に入る。〔六つ目〕（宿禰太郎館）道訓の伯母で紅梅姫の實母覺壽は、ひそかに齊世の宮を疊まつてゐるが、三つ子の娘の松月尼はそれを垣間見て、己が髪を切るまでに思ひつめた初戀の人であるのを知り、折から尋ねて来た妹の紅梅が宮の戀人であることが判ると、愈々嫉妬に胸を焦す。結婚小櫻の智宿禰太郎の父土師の兵衛は、この家の重寶たる繪図と長刀とを携て時平の恩賞に預らうと、小櫻を欺むいて盗み出させた上、宿禰太郎の健忘症を奇貨としてこれを取させる。松月は母が八

聲の鶴を合団に、宮と紅梅を京の法性坊に落さうとしてゐる事を知り、思慕の情やみ難く、鶴鳴を止めようと祈り、袈裟珠數を火に投する。と、その身は忽ち鶴と化し、庭に倒うた數多の鶴と融合す。覺壽は瘦ましさに娘を我が手にかける。腰迎へが来るが別御太郎はそれを暴露し、作り阿呆であつた事を明かして自殺する。小櫻の屍が池中から現はれて、重寶は悲なきを得た。〔七つ目〕（播州曾根海岸・同海上）玄蕃は菅公を海上に追うてこれを殺さうとするので、十六夜は兒を負うたまゝ追ふが、遠矢にかゝつて母子とも海に沈む。輝國は追附いて玄蕃を斬る。〔八つ目〕（筑紫白太夫隱居所）菅公に仕へる白太夫が伊賀源太に苦しめられるのを輝國が助け、娘小畠の母となる。十六夜の亡靈が訪れ海岸に漂着した女の死骸を葬ってくれと頼む。これが宮仕へに京へ上つた姉娘と判つて一家は愁嘆する。荒藤太は毒を盛つて父を殺し、跡を繼がうと企てるが、道眞の神力に躊躇される。時平の道心を知つた道眞は諸天に祈り雷となつて都に飛行する。〔九つ目〕（法性坊）柘榴火の怪「菅原傳授手習圖」の項中、「天神図」の脇面参照。（紫宸殿・天滿宮）雷鳴頗りに轟き、十六夜の靈現はれて、時平初め惡人連悉く殺され、菅秀才は菅家相續を許され、道眞の靈は天滿宮に祀られる。

【構想】一つ目。加茂社頭は、「手習圖」の初段の口、紫宸殿は「天神記」の初段第一軸。二つ目。花園は「天神記」の初段第三軸。記録所は同じく「天神記」の二段第一軸。三つ目。廣小路は「手習圖」の初段「傳授の段」と「墓地の段」七つ目。曾根海岸と海上は「天神記」の二段第二軸（但し紫竹は輝國に縛ね合せられてゐる）。八つ目。白太夫内は「天神記」の三段。九つ目。法

性坊は「天神記」の四段第三節。祭旅殿以下は同じく五段。かくこの作の一・二・三・七・八九幕は殆ど全く先行二作品に據つて居り、五瓶の創意は少しも見られない。五・六幕目は自せ場であるが、これは「手習體」の寺小屋と明寺を粉本として、見物の技術知識を豫想しつつ巧みにそれを換骨奪胎してゐる點に、異なる模倣とは本質的に異なつた歌舞伎作者としての手腕を、高く評價すべき價値が認められる。五つ目の長谷堆夫婦を寺子屋の源藏夫婦に代替し、飛び梅の穴を行つた松から、松の精を考へ出したり、笠見藏人を支番に見立て長谷雄を櫻痴の中から出したり、見物の耳に親しい寺子屋の臺詞を用ひて、「源藏戻り」や「首貫檢」や戸浪のくどきや松王物語を奥はせてゐる點は、極めて巧妙に效果をあげてゐる。六つ目も「八聲鶴」の裏を行つたのが面白くて、梅王・松王・櫻丸に對し、三つ子の娘を代置し、鶴から「鶴眼」を尋き出して、國太郎に鈍斬の狂態を演じさせる等なかなか妙である。なほ脚助を對象として描かれた時平が、「天神記」の單純な敵役型から出發して、實感として一步を進めてをり、彼をして名を成さしめた點が注意される。また二つ目の幕切れが所謂「笑ひ幕」としての演劇史的話題を提供してゐることは「傳奇作書」が述べてゐる。「影響」この作は後の「手習體」に對して、歌舞伎の天神記ものの代表作となつたが、原作の儘では残つてゐない。今日では、「時平の七笑ひ」と「鶴眼」の件が行はれる。「七笑ひ」のみを櫻痴が改作したものに明治三十年歌舞伎座の中幕「時平公七笑」があるが極めて不評であつた。

(文政十一年角鹿)、「手向山紅葉御體」(天保四年中村鹿等である。

【参考】傳奇作書(脚注下の物)○歌舞伎○眠御通○續々
歌舞伎年代記○竹の屋劇評集(明治三〇ノ一
一歌舞伎座序)○歌舞伎(昭和三ノ一一)○歌舞
伎脚本傑作集解説

天民近「詩傳」を見よ。

天武天皇 てんむ 歌人 **【御跡】** あそ 天薄
中原源眞人天皇。御即位前の御名は、大海
人皇子。「生歴」御降臨の年は詳かでないが、
崩御は朱鳥元年(一二四六)九月六日。寶算は
「日本書紀」に書き漏らしてゐる故、詳かでな
い。六十五(一代要記・島原祖述錄)、七十三(神國
正統錄・興福寺年代記・神皇正統記・如是院年代記
等)。後説によれば、天智天皇と御同年(或は天
智帝の御壽の計り方によつては却つて御年長)とな
る。故に前説に従ふべきで、これから通算す
れば、御降誕は推古帝の第三十年。【御陵】大
和國高市郡高取村大字野口の檜隈大内陵【系
圖】舒明天皇と皇極天皇(女帝)との御子、同腹
の御兄弟は、御兄天智天皇、御姉間人皇女御
二方である。その他に持統天皇(女帝)を初め、
多くの御妃と、高市皇子・大伯皇子・大津皇子・
難波皇子等、「萬葉集」に關係深い諸皇子とを
有せられた。就中、鶴田王(別項)との御關係は、歌人としての天皇を考ふる上に、忘る
べからざる重要事である(鶴田王參閱)。【御服】
大海人皇子は、若年の頃から英邁で、一三二
一年、中大兄皇子が新羅征討のため齊明天皇
を率じて筑紫に赴かるゝや、中央の政治を攝
行して群臣の間に信望あり、齊明天皇の筑紫
に崩せられた後、中大兄皇子皇位を繼がれて
からは、事實上の皇太子として天皇を輔け、
一三二八年正月三日、天智帝が近江大津の宮

に即位の儀式を舉げ
海人皇子を正式に即位された。一三三一年九月御柄重らせられ事を囁せられた所、強ひて辭し、皇后を皇子を皇太子として自らは天皇の御爲め張された。天皇凡て家して宇治を經て吉二月三日、天智帝即給ふ。弘文天皇これから天智帝を中心とし平な保守黨、近江源一族、個人的に、大海一派等が相寄つて皇対峙し、終に翌年六月潤田の大合戦となれ、海人皇子は妃の妹城國山崎の地に窮る。名な壬申の亂である。都は焼亡し、その廢め多くの人に不朽の人皇子は大和に還り、卷二の標目には、「すわ天皇」と記すのを撲滅と變つて、事と國史綱要の事を志す。

詠説せしむる等の事あり（古事記參照）、即位第十三年には八色の姓^姓を定むる等の事あつて、朱鳥元年九月崩せられた。

【作品】すべて「萬葉集」に出づ。同集卷一雜歌部に、御生野遊獵の折頃田王の贈歌に答へられた「紫の匂へる妹を憎くあらば」の作。三首へだてて、「天皇御聲歌」と題する「み吉野の、耳我の嶺に時無くぞ雪は降るとふ」の長歌、次にこの長歌の語句の少し變つた異傳の長歌、次に「天皇幸^幸吉野宮^宮時御^御聲歌」と題せる「淑^淑き人のよしとよく見て」の短歌、次に卷二相聞部に「天皇、賜^賜藤原夫人^{夫人}御歌一首」と題せる「わが里に大雪降れり」の短歌、以上である。うち耳我の嶺の異傳の歌は獨立に數ふべきでないから、總計長歌一首、短歌三首である。

【作風】今日残つてゐる御製があまりに少く、殊にその代表作たる耳我の御製は、すぐ次にも酷似の作（内容は短歌になつてゐる）があつたりして、或は巻十三のなどが原歌で、それの轉化したものが天皇の御製と信ぜられて、卷一に記錄されたとも疑はれぬ事もない。天皇の御製と眞正面から信じていゝかどうか疑はしい故に、今日見得る材料は、甚だ不完全なものであるが、一貫して見得る特色は、一首の調べが大まかで伸び／＼してゐる。「我が里に大雪降れり。大原の古りにし里に降らまくは後^後」などは、特にこの感が深い。吉野で作られた「よき人のよしとよく見てよしと言ひしよしぬ^{吉野}」よく見よよき人よく見つ」の如きは、言葉の戯れの入つた作として著名であるに拘はらず、輕佛の風がいさきかもない。これは時代が古いのと同時に、その御人格の自らの發露であらうと思はれる。なほ「耳我

くして返禮したといふ事である（講論）。淡々
も自分からは極めなかつたが、いつとなく百
韻銀一兩・五十韻銀二匁、歌仙一錢目半といふ
朱料にきまつたと云ふ。後の俳士は朱料を書
き附け、當座に贈らない人へは書附をやつて
催促するやうになつた（講論）。とにかく雪中
庵・其角堂・其日庵などといふ家柄の宗匠は、
技術はしばらく措き、その家格で相當な點料
を貰つてゐたらしく思はれる。明治以後新派
が興つて、舊派の業倅も自然衰へて行き、點
料を出して宗匠に添削を乞ふ者も少くなつた
が、それでも宗匠の間には、例へば雪中庵清
規などといふものもあつて、添削料を取つて
説草を返してやる事も残つてはゐる。

【参考】花見草 高島博士○滑稽太平記 北原静生
○詩論世說高僧開闢○詩論白寫○俳家奇人談

竹内玄々一

〔新見〕

篆隸萬象名鑑てんじいほん 語學書

三十卷六帖 〔著者〕 内海 〔諸本〕 現存最古
の寫本は、京都府下、梅尾の高山寺の藏本（國
寶）で卷末に、「永久二年六月、以敦文王之本書
寫之了」とある。外に二三傳本があるが、何れ
も高山寺本を寫したものである。大正十五年
より昭和三年に至り高山寺本を複製して崇文
叢書第一輯に収めて初めて刊行した（六冊十六
景、外に「日次解題」一冊）。【内容】梁の顧野王の
「玉篇」を抜萃したもので、漢字を難音（今の讀
書）で標出し、その上に篆書を冠し、下に反
切及び釋義を記してある。文字の順序、文字
の數などは、玉篇と少しく異つてゐるが、大
體は「玉篇」のまゝである。字音の反切は、「玉
篇」に二種記してあるものは、大抵その一つを
取り、或は直ちに音を註してある。なほ極め
て少數ではあるが「玉篇」とは異なる音を記し

た所もある。文字の解釋は、「玉篇」の説の要旨を抜き、又往々「玉篇」にはない註を加へてある。【價值】翻野王の「玉篇」(三十巻)は唐代、井に我が奈良朝前後の漢字の研究には必要缺くべからざるものである。然るに「玉篇」は、唐・宋と時代を経るに従つて、屢々改訂せられ、全く原本の面影を失つてしまつた。而して六朝時代のまゝの「玉篇」は支那では散佚して、今日は日本に全體の約半分、十四巻半ばかりを藏してゐるに過ぎない。然るに本書は、大體「玉篇」の面影を傳へて居り、且つ三十卷全體が残つてゐる。即ち本書は「玉篇」の散佚した部分を補ふ唯一無二のものであり、また現存の「玉篇」を校訂するためには頗る貴重な資料である。なほ本書に記された篆書は、約一千字あるが、肉筆の篆書としては、その古いことに於て、最も珍重すべきものである。その字體は古印の字體と相似てゐて、篆書の研究には遠すべからざるものである。本書は、日本人の手に成つたものとして現存最古の字書である。

【参考】弘法大師の文藝(内藤虎次郎)(日本文化史研究)○篆詩萬象名義解題山田翠壁(翠文筆社一ノ四三)○篆詩萬象名義を見て岡井眞吾(文一九ノ一・三)

1688)の「ザ・ビルグリムス・プログレス」(1678年初版)「名刺」譯本に數種あるが、何れも「天路歷程」の名を用ふ。これは、原書の支那譯に附せられた題名である。【刊行・譯者】(一)最も古い邦譯は「七一報」(明治八年十一月卯月で創刊、日本最古の基督教書院所藏のもので、第十五號(九年四月)から、第二卷第三十四號(十年八月)まで、六十六回に亘つて連載)。これは同治九年五月改名の「一報」(1870)である。



二三九

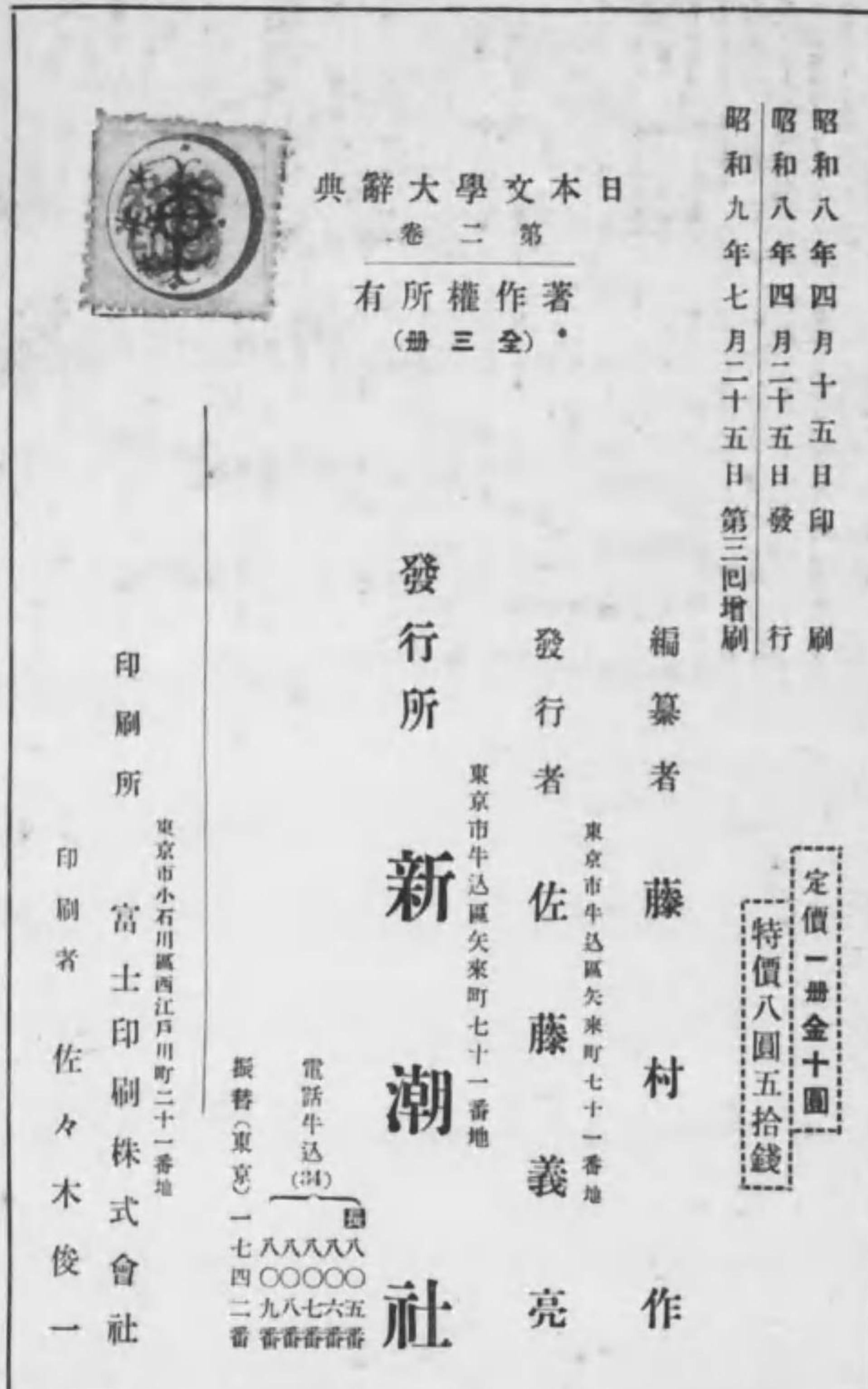
一
六

15122

そのまま取つたものであるが、若干の字句を訂正と省略されてゐた漢詩が全部収録され、又單行本の方には最初の約一丁に當る部分が口語體に改められてゐる。本書の譯者は從來佐藤喜平とされてゐたが、實際は村上俊吉の譯である。(村上は關西基督教界の重望を負うていた先駆で、文筆に長じた所から、多くの支配本の翻譯を負した)。この本は明治十四年・同十六年に重版された。(三)明治十九年刊本。譯者ホワイト(日本浸禮教會牧師)。洋裝四六判、澤山の意味ある銅版畫を挿入してゐる。文體も品のいい翻訳折衷で、これも原作の前編だけ。この譯は主として英譯によつてゐる。なほ文章の碎け方より推して、外人の手に成つたものとも思へぬから、多分ホワイトの口授を日本人の文筆になれたものが筆記述削したのでもあるらうか。これに二十二年・二十六年・三十四年等の重版がある。(四)明治三十七年十二月刊本。池亭古譯。洋裝四六判、挿畫も數葉ある。文学者の筆だけに讀んで面白いが、矢張り宣譯の城を駆してゐない。これも十年ばかりの間屢々版を重ねた。(五)明治四十年十一月刊「天路歷程續編」。池亭古譯。續編丸譯の最初。なほこれは四十四年十一月、前編四版刊行の開、これと合して一冊とした。(六)大正二年十二月刊本。松本雲舟譯。前・後編を併せてをり、割合に原本に忠實なのを特色とする。これも十七八版を重ねた。(七)昭和二年一月刊「全譯天路歷程」。益本重瑞譯。譯者はバンヤン研究家として基督教界に知られてゐる人で、これが最も信頼すべき邦譯である。外に、抄譯・解説などの類も甚だ多い。【内容】著者バンヤンが「此の世界でふ莢野をさまよひつつありしき」、ふと或る穴(バンヤンが投じ

「あなたがドフード博士」に出逢ひ、その中で眠つたところ、面白い夢を見た。その夢が即ちこの小説中の出来事となつてゐる。クリスチヤンなる人物が、一書『聖書』を手に重荷を負うて「滅亡」の市を出立する。彼の目的は、早くこの重荷を片づけて、「聖市」に辿りつきたいといふにある。彼は妻子隣人が歸れと呼ぶ間に腸を断ちながらも、イバン・ジエリストの指示に従ひ、丘を越えて遙かな旅路に上る。この旅路は凡そ十段に別れ、その各々がキリスト教徒の生活の艱難と勝利を人々と描いてみせてゐる。試練・艱難・悲喜・平和・誘惑、何れも生ける人々の場合と異なる。又出て来る人物が男も女も悉く生命をもつてゐる。バンヤンの藝術的天才は驚くべきものがある。場面も亦それぞれ否等の靈的経験を見るが如くに表現してゐる。「失望」の泥沼、「美はし」の宮殿、途中の「獅子」、「罷辱」の谷、惡魔アボリオンとの闘ひ、恐ろしい「かげ」の谷、「虚榮」の市、殊に有名なのは「疑ひ」の城で、こゝではクリスチヤンはホーブフルと共に巨人「絕望」のために牢獄に投げ込まれる。が、やがて「青春」 愉樂の山を觸、河を渡り、「歡喜」の市について、目出度く目的をとげる。だが氣がついてみると天國の門からも、「滅亡」の市からと同じやうに地獄に行く道が通じてゐるのに愕然とした。「かくて我は醒ざめ、その夢なりしを知つた」と、バンヤンは全篇を結んである。

終 卷 二 第



終